

俳句雜誌

令和二年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第五号

水 明

2020 5月号



《今月のかな女》

紹を刺せし疲れ目に見る牡丹かな

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

奈良時代から千二百年もの永きに亘って受け継がれてきた日本刺繍の一種である「紹刺」のことか。紹の織物の織地に、金糸・銀糸・色糸の撚糸を縦・横・斜めに刺して図柄を構成する技法で、かなり根気が要り、手も指も、それ以上に目が疲れるだろう。疲労した目が、花の王と言われる牡丹に癒やされている。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

プリン乞ふ妻のわがまま春の風邪

阿 部 幸 代

何ともかわい妻のおねだりである。高級ブランドのバッグや靴でも求められたのなら、『こいつめ調子に乗るな』と、夫もむくれる場面だが、プリンなら、高級菓子舗の品でも、大して金額が張らない。勤め帰りに、銀座資生堂パーラーか風月堂あたりで買ってきて妻を労ったことだろう。

(鬼之介・推薦)

水明

令和2年
5月号

華の一句

「水明創刊90周年記念」全国大会・祝賀会延期について

『水明』誌の今後のスケジュール

藤の八景(作品)

山本鬼之介

春のうた(近詠)

吉住 光弥

身の辺り(近詠)

栢尾さく子

雪 景 雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

硯箱 季音月評

井口 俊晴

季音「雪」(同人作品)

石山かつ子	大橋 勉代
大村 節代	ほか

季音「月」(同人作品)

高島 寛治	柚木 治子
鳥羽 和風	ほか

季音「花」(同人作品)

梅澤 佐江	松井由紀子
井上 玲子	ほか

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

現代俳句鑑賞

俳誌望見

句集喝采

網野 月を

梅澤 佐江

近藤 徹平



四 賞 発 表

令和二年 水明賞
 令和二年 季音賞
 令和二年 かな女賞
 令和二年 新珠賞
 選考経過
 受賞のことば
 新珠賞選考経過

新季音同人発表

水 明 集

越田 栄子
 野田 静香
 渋谷さいち
 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水 琴 窟 (水明集三月号鑑賞)

池田 雅夫

水明例会報・各地旬会報

77

全国大会兼題句募集

69

夏行のご案内

85

風声・発展基金御礼

84

後 記

86

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

水明俳句会 会員 各位

水明俳句会
主宰 山本鬼之介

「水明創刊 90 周年記念」全国大会・祝賀会 日程延期についての詳細

水明 4 月号「急告」でお知らせの通り、新型コロナウイルス感染症蔓延の状況が、3 月に入ってからなお一層深刻化してきた現実を考慮し、3 月 26 日(木)、ロイヤルパインズホテル浦和の責任者と話し合いの結果、「水明創刊 90 周年記念」全国大会・祝賀会を、11 月 9 日(月)に延期することにしましたのでご了承願います。以下にその詳細と関連事項を記します。

【延期日程の詳細】

令和 2 年 11 月 9 日(月) ※会場・時間など変更なし

◆ 7 月末に双方で協議し、その後の状況が好転せず、この日程でも開催が困難と判断された場合は、更に延期します。

【受賞者の表彰について】

水明の各賞及び記念特別作品・大会兼題句の表彰ほか、表彰は全て延期される全国大会において行いますが、それぞれの発表は 5 月号以降誌上で行います。

【全国大会兼題句の投句】

募集締切 5 月 30 日(出)発行所必着でお願いします。

【記念全国大会・祝賀会の申込み】

日程以外の開催要項は変更ありませんので、すでに水明誌に掲載の「ご案内」の通り、6 月 15 日(月)までに申込みをお願いします。

以 上

水明俳句会 会員 各位

水明俳句会
主宰 山本鬼之介

「水明創刊 90 周年記念」全国大会・祝賀会 に関わる『水明』誌の今後のスケジュール

右ページの通り、記念全国大会・祝賀会の日程は変更
されましたが、水明誌の内容とスケジュールは当初の
予定通り進めます。その内容を、下記の通り具体的に
お知らせします。

〔記〕

- 【5月号】 水明四賞の発表 四賞の選考経過（主宰）
受賞のことは 新珠賞選考経過（選考委員）
- 【6月号】 水明賞受賞者ノオト（自選 20 句と評伝）
- 【7月号】 新珠賞受賞者ノオト（自選 20 句と評伝）
- 【8・9月合併号】
水明創刊 90 周年記念特別作品発表
水明 90 年史年表 長谷川かな女句鑑賞
全国大会兼題句作品と成績発表
- 【10月号】 新同人紹介 夏季競詠の発表
- 【11月号】 季音賞作家特集
- 【12月号】 かな女賞作家特集
- 【1月号】 水明創刊 90 周年記念全国大会・祝賀会の記
私の 2 句（水明俳句会全会員）

以 上

藤の八景

山本 鬼之介

目礼の様になるひと藤の苑

山藤がいま満開の駐在所

藤浪と競ひあふかにフラダンス

白藤に雅なるかな巫女の指
黒塀の窠れを慰する藤の房
ちんまりと藤棚のある散歩径
三つ編み少女いまは媪に藤屋敷
出窓より藤に語らふ夜想曲

春のうた

吉住光弥

薄氷に 残心と云ふ底ぢから
きのふけふ腋の下より梅恋ふ風
白梅や蕊の金色 暁の天
山菜萸咲く空に一気の刷毛捌き
いつしかに白鷺の艶野川肥ゆ
天空 早や誘ひの彩 燕来よ
富士山湧水ふりむき 仰ぐ初桜

晩冬の季語「春待つ」の頃程、心の高揚を感じる日々は無い、それは祈りにも似たもの、特に雪国生れの者には尚更のことである。今年には「ウイルスの蔓延」でめちやくちや、特に齢晩年の者には悲しい気持。九十の端を忘れ春を待つ

阿部みどり女

こんな元気な気持には、とてもなれないが、せめて悪疫の早く立去ることを祈りながら。

身の辺り

栢尾 さく子

春疾風空ゆくものの皆急ぐ
誕生日毎年もらふ華鬘草
ところどころ風立ち花菜畑かな
雨粒をはじめく葉蘭や利久の忌
窓開き空近くする春立つ日
明日葉に元気を貰ひ指鳴らす
桜見に角のきまらぬ握り飯

暗いニュースが長引き外出を控え家の中に居るので、久しぶりに古いCDを整理しながら遠い昔の音色にひたった。高橋真理子さんの「ジョニーへの伝言」や「ランナー」などを懐かしい人との再会を果たした如く聴いた。過ぎ去った日々の生活は再び戻らない。往時は母も健在で、夫もゴルフを満喫していたっけ。訳のわからない涙がとめどなく流れる。

雪景

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野広子

◇椿（二月号）

波多野寿子

◇真鶴半島（二月号）

矢作 水尾

娘と居れば日差しはやさし紅椿
二月の忌夜目にもさやか白椿
姫椿ころころころとコロラチユラ

誰と居るよりも心の休まる時間。日差しは確実に春らしくなり紅椿が優しい。昼は勿論夜目にも際立つ白椿のあまりの美しさに心を奪われる。秋子先生も一瞬にして人々の心を虜にする魅力の方であったと聞き及ぶ。姫椿は山茶花の別名で椿の様な派手さはないが、小振で可憐な花である。コロラチユラとは歌劇の技巧的な唱法であるが、中七からの言い回しが何とも可愛く、あたかも歌っている様である。

琴線にひびくトレモロ落椿
落椿打てど点さぬ石灯笼

お琴を嗜まれる作者。トレモロは高さの違う二音を速く反復する奏法で、震音が美しい響きを奏でる。庭園を臨む座敷からは落椿の緋色が見えて来る上琴線は心の感動にも繋がる。音もなく落ちる椿。ある物は地や池にそして一つは石灯笼の上へとまるで火種のごとく堅く冷たい石の上に落ちた。が石灯笼には灯が点らない。無機質の物と今の今まで生を受けていた物との質感や色の対比が面白い。水、空気、景色三拍子揃った松本在住の大先輩ならではの御句である。

鯛雲 鯖雲 空を満たしたり
光り合ふ椎の実拾ふ御料林
久々の故郷の空はまるで波のような大小の鱗雲に覆われている。普段目にするそれとは全く違い「満たしけり」が圧巻の風景を表している。二句目半島の中心部は深い森となる。作者は海を望み、晶子の碑を眺め且つ足元の椎の実や落葉を拾う。何げない一連の動作を詠み、下五の御料林によって句が引き締まり椎の実も特別の物のように思えて来る。

海は紺冬の到来岬に立つ
流木の焚火のあとを波洗ふ
冬涛にときどき消えて漁の舟

濃紺の海を見て冬の到来をひしと感じた作者。岬から遙かに太平洋を眺める「海は紺」と強い導入が魅力的である。海岸の岩場にある焚火のあとの汚れた石や灰は、冬の荒波に繰返し洗われる。そこには愛する海を守る地元仲間達の結束も見えて来る。三句目遠くに見える漁舟が荒涛にその姿を消す。暫くして舟の姿を確かめホツとする。家族の為冬の沖へと舟を出す人々の無事を祈りつつ目を離せずに居る作者小さな「舟」大きな「涛」の選択が流石である。

◇ばらと楽譜（三月号）

椎野美代子

冬のばら致死量ならむ棘棘棘
冬ばらや金輪際のいろ絞る

平仮名の「ばら」は冬の花を示すと言う感性豊かな作者ならではの感覚。確かに初夏の薔薇とは違い「ばら」には美しさの中に静けさや命の強さも感じられる。幹の鋭い棘は古木になる程大きく堅く人を拒むごとく密集している。その棘で傷を負えば致死量になるかもと想像する。棘のリフレインが効果的な御句である。二句目冬のばらなればこそその極限のいろを持ちこれ以上も以下もない唯一無二の命を絞る。金輪際とは言えそうで言えない。

吐息せば烟るましろき冬のばら
遭されし楽譜冬ばら低くうたふ
冬のばら和紙の乾きをそのままに

公園のばらは消毒液で白くなっていたらしい。掲句の吐息は「こんなに消毒されて」と作者の吐息か、我身に振り掛けられた白い液体に閉口のばら自身の吐息であろうか。美しい花を保つ為にはこれ位の事をやらなければ、害虫や病気から守れないのである。二句目大切な人の遭した楽譜はピアノの物か歌の物か筆者には不明であるが、卓のばらが作者に合わせた歌い出す。誰にも邪魔にならない程に低く緩やかに。静かな刻が流れる。三句目空気の乾いた冬のばらは、まるで和紙で出来ているように見える。透き通るような花弁が丈夫な和紙に見えて思わず触れてみたくなる。どの御句も幻想的な空間を感じ、正に薔薇の様にいつも華やかな作者である。

◇冬霧の宿（三月号）

大橋 迪代

鯉ねらふ鼈と爺の知恵競べ
冬霧の宿の亭主の誉め上手
暖炉爆ぜ放蕩話たけなはに

弱肉強食の世界。大切に飼っている鯉がいつの間にか減って行く。相手は鼈と判っている。夜行性の奴は手当り次第に小動物を襲う。池に金網を張ると、せつかくの鯉が見え難いさてどうするのか、ワクワク臨場感のある一句。某所は馴染の宿。ご亭主は格式張らない気さくな人柄で、作者とは相性が良いのである。会う度にさらりと出る誉め言葉も決して御世辞ではなく、人を心地良くさせてくれ冬霧が宿を静かに包む。荷を下しいつもの暖炉の部屋へ行くと焼べられた薪が爆ぜて火の勢いが増す。夕飯のあとは皆自然に暖炉の前に集まり昔話に花が咲く。話上手なご亭主に笑わされ時が過ぎる。

よこたはる 玻璃天井の冬銀河
冬霧に髪を濡らしつ連写せり

宿の天井の一部はガラス張りになっていて、そこにはそれは見事な銀河群が見られた。言葉は無用、何もかも一瞬にして無となり只々心を奪われて見つめる。霧の中に居ると、何となくしっとり濡れて来る。作者は愛用のカメラを手に霧の中に立つ。辺りは幻想的な世界となっている。晴れた景色も良いが霧の山々や里の風景は又とない被写体となる。何時お会いしても明るく元気な作者そのままの元気な御句に出会えた。

硯箱

◆季音二月

井口俊晴

鏡餅の罅割れにある脱力感

石井 喜恵

暮れからずつと床の間に飾ってある鏡餅。三が日が過ぎてくると、何やら埃を被っているような気がしてならない。単なるお飾りではなく、年神さまへのお供え物という立派な役目がある。しかし、空気が乾燥しているせいで、あちこちに罅が入って、鏡餅としての威厳は薄れてきたようだ。とりわけ二枚重ねの下にある餅は、上の方からの重みに潰されそう。何だか疲れたなあという、ある種の脱力感是人間だけのものではないようだ。

寒林やトランペットの透き徹る

星野 和葉

樹々の葉は落ち尽くし、針のように尖った枝が天を突いている。通りから林に足を踏み入れた作者は、ふとトランペットの響きを聞いたように感じた。金管の華やかで輝かしい旋律は、一瞬にして隙間だらけの林の中をすり抜け、木の梢を

超え、冬の天空に駆け上って消えたように思えた。その音色は哀しみであり、優しさでもあり、また、厳しい冬の終わりが近づいていると告げているようでもあった。

威儀正し黒艶やかに初鴉

由良ゆら女

鴉は生ゴミの袋を破って散らかすので嫌われ者だ。しかし、漆黒の羽根が日の光を浴びるとつやつや光り、一羽だけで電線にとまっているのを見かけると、威厳のようなものさえ感じる時がある。とりわけ、新年初めて見る鴉は、日ごろのグーティーなイメージがなく、黒の正装で威儀を正しているように見えるから不思議だ。それもそのはず、もともと鴉は頭がよく、生きるためにゴミ漁りをしているだけ。彼らを悪者にしてしまったのは、地域の決まりを守らない、身勝手だから。

初御空白の艶ます鷺舞へり

森田 祥絵

こちらの句は白鷺である。鷺は鶴と並び、なぜか「絵になる」不思議な鳥だ。元日の朝のことである。ここから近いところだと、見沼田圃のあたりであろうか、眩しいばかりの朝日を受けて羽は雪白に輝き、雲ひとつなく晴れ上がった大空へとみるみる舞い上がって行く。白鷺が飛び去った方角には、遠く雪を頂いた富士山も見える。新年を寿ぐ日本画のような光景である。

オリオンの真下で反り身露天風呂

小倉 倭子

羨ましくなるような句だ。満点の星の下で、手足を思いきり伸ばし、仰向けに反り身になって浸かる露天風呂は、熱いほどの湯加減だ。頭の上に見えるのは天文ファンにはおなじみのオリオン座。狩人オリオンの肩のあたりで光っている赤く大きな星はベテルギウス。少し離れて青く光っているのは、おおいぬ座のシリウス（天狼星）で、名高い「冬の大三角形」を形づくっている。ギリシャ神話の時代から三千年、悠久の時間が流れる。

声たてて乳歯二本の初笑

大場 順子

赤ん坊が声を上げて笑った。去年生まれたこの子は、以前はおっぱいを飲むか、泣くか、寝ているかが「仕事」だった。

それが六カ月ほど経って、最近はおききが活発になり、よく声を立てて笑うようになった。いまでも何が面白かったのだから、可愛い笑い声を上げた。新年を迎えて初めて、二本生えそろった乳歯を見せての初笑いである。傍にいますおばあちゃんも目を細め嬉しそうだ。どんどん大きくなあれ。

福笹の心地よき音小判跳ね

上戸千津子

十日戎に行つて、福笹を戴いて帰る。参道に「商売繁盛ササ持つてこい」のはやし声が響く中、福笹に結え付けられた金色の小判が跳ねて澄んだ音を立てる。それが何とも心地よい。小判に混じつて、真つ赤な鯛や米俵の飾り物もぶつかり合つて音を立てている。吐く息は白いけれど、寒さに負けぬ熱気が心地よく伝わってくる。今年も健康で商売繁盛、良い年になりますように。

大仏の螺旋髪が光る寒落暉

後藤 綾子

真冬の太陽が今にも沈もうとして、西の空は茜色に燃えている。ここ鎌倉の露座の大仏様の頭、あの田螺みたいなもじやもじやした髪の塊り一つ一つが、夕日を浴びて光っている。大仏様がいらつしやる高徳院からは海が近く、江ノ電の長谷駅を跨いで海鳴りが聞こえてくるようだ。何もかも雄大な光景である。

季音雪



春 着 石山 かつ子

大仰な君の話や春炬燵
マネキンの飛天のやうな春着欲し
引き締まる絹の匂ひの春着かな
刺股の壁に吊るされ春北風
舞姫は真紅のドレス玉椿

白木蓮 大橋 廸代

齟齬抜かれいつきに錆ぶる白木蓮
ひるがへる煮沸のマスク姫辛夷
パンデミック一家総出の土筆摘
理髮師の折りたる雛や赤と青
生きてをるうちに聴きたし亀鳴くを

充電中 大村節代

白酒や父の遺愛の夜光杯
宿酔に薄味うれし蜆汁
春の野の夜叉か天女か迷ひ子か
つばくらめ遠くから見る大仏殿
山笑ふ電気自転車充電中

てふてふ 栢尾 さく子

渡りゆく鴨のうしろの隙間かな
鍵形にまがる白線建国日
ゆつくりと黄蝶家を出るとき右ひだり
裁ち物のチャコの曲線春の雪
どんよりと肉の切り口 蝮ま蛇むじ草ぐさ

大試験 菊池 ひろこ

枝に風幹に矢印大試験
一陣の風も出来事大試験
霞みつつ緊急情報ながす街
春霞鳩らはるばる来し風情
ヒヤシンス夜はそれぞれの色で佇つ

上田 縞 五明 昇

屈まりて漁る艶本春浅し
蜆舟むかし栄華の十三湊
咲き初めの白梅を守る冠木門
雨水の日夕刊にある仄湿り
上田縞の機音軽し山椒の芽

日活ポルノ

境

延昭

春

嵐

島

津

初

花

離れ家の銅の廂や梅の花
鰐広の帽子斜めに春の風邪
山毛櫨林の雪解まるく根元より
春の雷目玉ひん剥く仁王像
名画座の日活ポルノ春惜しむ

春あらし背中押されて長話
一瞬の絹裂く悲鳴春嵐
柔かな春土を踏む一步二歩
杖置いて歩数を増やすたんぽぽ野
丸腰のビニールハウス春疾風

蒲公英 椎野美代子

鼓草 鈴木康世

たんぽぽ野童話童画の多産かな
蒲公英やゴッホの色を浪費せり
スカートの花柄つなく蒲公英野
たんぽぽの絮の漫遊ボヘミアン
二つ折りの翅の降り立つたんぽぽ野

無為自然修道院の黄蒲公英
蒲公英や邂逅の友修道士
初恋は色褪せぬもの鼓草
晩禱の地にたんぽぽの絮しきり
狼煙台跡火種の如くたんぽぽ黄

ミュージーズ 永野史代

梅の咲く 波多野寿子

教会の木椅子の窪み余寒あり
水甕にあふるる水も雨水なる
指先でそつと触れをり山椒の芽
母の遺せし摺り鉢が待つ山椒の芽
みづうみの女神半身陽炎へる

枝ぶりは見得を切るかに梅の咲く
空あをく見頃の梅に鳥あそぶ
白梅や琴の師匠の凜然と
ジーパンの子がお針する春の風
遠き日の思ひふつつ花便り

浅 春 西山貴美子

プライド 星野和葉

梅ほつほつ語尾の短かき鳥言葉
合嗽薬はうがひ用のみ余寒なほ
文机に光る鉛筆春の雷
絵馬どれも就活言葉春浅し
万華鏡の華すぐ崩れ春の雷

花曇路上ライブに人まばら
代替りの家の新築つばめ来る
片脚はビルに隠して春の虹
素焼鉢洗ひ終へたり春の虹
プライドの高き女将や山椒の芽

影 茂木和子

春日傘 山中順子

たんぽぽ野下校のチャイム遠く聞く
げんげ田を均らして土の艶めきぬ
走り根の擬態めきたる春日影
仏塔で啼く春分の日の鴉
中日や鬼簿に想ひを寄せ語る

板前の串刺しの技春の水
源流に近き沢音山椿
弁膜にも休日欲しと朝桜
入院とは不自由の自由四月馬鹿
大過なくすぎたる米寿春日傘

柳の芽 矢作水尾

涅槃雪 山中みどり

わが影に稚魚散るはやさ柳の芽
山鳥の声の散らばり山椒の芽
雛の夜は母似が揃ふ座敷かな
城堀に銀の輝き柳の芽
肩落とし平らにかくる春シヨール

風鐸の音かるかと涅槃寺
学僧の細き首筋涅槃西風
酒饅頭の肌理の白さや涅槃西風
反古とせし口約束や涅槃雪
降り止みて匂ふばかりの春の月

や よ ひ 由良 ゆら女

ワニの口 網野月を

目瞑るや五彩たなびく雛祭
雛をさめでんぐり返りする男の子
雛流し津波来たかと思し召す
啓蟄や光まみれに根切虫
結界のほしき大空霾ぐもり

啓蟄や九分は這ふもの遊ぶもの
大石忌己は分らぬ加齢臭
花冷やメール返信待つてゐし
訳もなく気に障る人暮遅し
遅日のワニ口開いたまま閉じられず

獣 声 吉住光弥

余 韻 石井喜恵

雪解けや老の別れは一人づつ
獣声里に下り来て雪解川
踏石に囲ふ懐彼岸の陽
待ち人の心のとびら燕開け
春分に分のちからや悪疫討つ

少女期の含羞に似て梅一輪
雨匂ふゆつくりほどく山椒の芽
昂ぶりてひかり離さず雪解川
倒木のふさぐ山道けふ雨水
コンサートの余韻深むる雨水の日

(順送り)

季音月

入り彼岸

高島寛治

祖父の名の一字は我に入り彼岸
少年の夢は飛行土木の芽吹く
陽の温み程好く混じる春の土
曝けだす会津嶺高き雪解かな
芽柳の揺れて山河を呼び覚ます

忘れ傘

柚木治子

土筆野は浄土をかもし空真青
宇宙に住む夢など語り土筆摘む
匍匐して写す土筆と空の青
春雨や寄りし娘の忘れ傘
父と子の秘密の釣場葦の角

若州

鳥羽和風

ふらここに鏝の絡まる音ぬくし
山吹や庭師が決むる石の顔
若州の竹林濡らす菜種梅雨
いしころに一句認む磯遊び
春愁や遊女の墓に三味の音

春田打ち

宇田白鷺

春田打ち芥のゆると動きけり
カタカナの古電報や入彼岸
句碑八基一つは祖父の鮫の碑
春眠や目ざめてもなほ夢の中
草餅や古き捏鉢こねばちよびさまし

土現るる

藤澤喜久

土現るる地球の裏のカーニバル
出羽富士やゴム鞠はづむ土現るる
下駄下ろす半年ぶりの土恋し
李咲き少年すこし野性おび
アネモネや閉づる頁の溜息す

たんぼぼの国

丸山 マスミ

突出しの小鉢に映ゆる山椒の芽
万歩を目指す靴にしつくり春の土
走り根にかすかな息吹春の雷
捨畑にたんぼぼの国生まれをり
花冷を来てつい潜る縄のれん

過去問

小倉 倭子

過去問を繙く志望の大試験
両親に挟まれ祈願の受験生
風向きに受験の絵馬の競ふ音
ハモニカを一節吹いて卒業す
抱擁を寸時に解いて卒業子

蒲公英

森田 祥絵

置き去りのボールの沈むタンポポ野
タンポポに近づきすぎると犬の鼻
水温む大地の光る遠岬
水温む二羽の水尾の一筋に
初桜五輪咲いたと賑賑し

風見鶏

田寺 玲子

紅椿百の落花に百の影
春愁や風わたり来るゴッホ展
風見鶏 仰ぐ少年風光る
ウイルスの話もちきり木の芽冷
亀鳴くや雨の天文科学館

明石産

森本 早苗

明石鯛 吾も胸張る明石産
初音聞く伸び放題の墓地の草
いかなご漁打ち切りの鳥忌を修す
銀輪の大挙下船や春の鳥
思ふ日や春の雪さへ切々と

豆験者

荒井 俱子

梅花二分火渡りをする豆験者
畑中の禰宜の住まひや梅の花
春の風邪見で見ぬふりのうす埃
土の香をほのと立たせて耕せり
春の雨蛇の目が似合ふ京の町

身の置きどころ

池田雅夫

存分の風を興じて桜巨樹
春風や馬の睫毛の双曲線
粗茶淹るる所作しなやかに春の昼
遣り場なき春愁の身の置きどころ
惜春や傘傾けて行き交へる

山笑ふ

十倉和子

風鐸の韻く朝や牡丹の芽
燕来と絵本の兎立ち上がる
耕運機下りれば菜の花いろの月
春暁の夢のちちはは若かりし
師と揺らす湯への吊橋山笑ふ

生食パン

町野広子

夕刊を小脇に山椒の芽を摘みぬ
煮魚の上にハラリと山椒の芽
畑に人ぼつぼつ増ゆる雨水かな
童謡を流し余寒の灯油売
生食パン求め余寒の列に付く

たんぽぽ

臼井由美

たんぽぽに輪廻転生するもよし
雪解けて先づたんぽぽの北大地
うぐひすの一声に朝動きだす
沈丁花門をはみ出し人を待つ
立春の大夕焼に富士聳てり

春眠

川野妙子

山宿の瀬音さやかに春眠し
春眠の大き枕のゆるぎなし
昔日の吾ゐて友ゐて春の夢
春の雪あんぱんまんの好きな子と
黒雲の怪しき動き春夕焼

花の坂

松本光子

庫裡の香も春めき明し尼の寺
寺に咲く垂れ桜の祈りかな
両岸に枝を伸しつ花の坂
そぞろ歩く花街跡の木瓜の花
桜堤人は疎に車椅子

春きざす

加藤 むら子

農家減り不用の水路蝌蚪群る
彼岸来て亡父の一言今もなほ
無言にて踏む春昼の岩畳
溪谷を挟み兩岸春きざす
残り鴨競泳風の尖がりたる

木の芽時

井関 礼子

木の芽張る声無き声の讃歌とも
茎立の踏ん張つてゐる屋敷畑
季の使者のごと土手に笑むたんぽぽよ
古雛 共に 歳月重ね来て
変り映え無きを良しとし春寒し

遺り香

渡辺 舍人

お茶漬けの仲とトさる春祭
宴に鱒酒バタヤンにフアルセット
盆栽棚小路縦横接木に芽
巻きやれば妻が遺り香春シヨール
春の海記憶に泪すること

黄 砂

川崎 道子

黄砂降る睨みのきかぬ鬼瓦
料峭やいま出港の拳手の礼
衣擦れの近づく気配朧の夜
涅槃西風大樹に迫るチエーンソー
春雷や長押の写真傾ぎけり

寒暖の差

井上 燈子

春昼や兄研きぬし古農具
彼岸とてコロナコロナで出歩けず
寒暖の差に身体が追ひつけず
仏塔の影の長短花の昼
落椿風化のしるき野の仏

たんぽぽ

内田 恵子

片隅にたんぽぽの笑みゴミ置き場
蒲公英野向かう岸よりビル迫る
水田を低く低くと截る燕
春分や骨董市の鳴る時計
女子会や締めはおむすび蜆汁

春の霜 岡野 順子

春の霜きらりきらりと我が心
春の霜光りてぐさり身の内に
たんぽぽに頬を撫でられくすくす
たんぽぽ野男大の字空青し
荃立や落日に身の細りかな

落し物 霜中 冬至

辛夷咲く雪なき山へ落し物
むしがれい認知症とて忘れまい
若狭人みなお人良し送水会
お水送り文句もなくて列に就く
四温晴明日の天気は覚束無

兜太忌 伊藤 敦子

兜太忌やあの掌の温もり忘れまじ
磯巾着波を引き寄せ触手あげ
「ありがとう」今年で最後と雛をさめ
出口なきコロナウイルス春の闇
地動説とや春堀に足とられ

第57回現代俳句全国大会

作品集

投句締切は
7月31日
(必着)

◆応募規定◆

- 投句料3句一組・2千円、何組でも可。
ただし、新作未発表作品に限る。「3組9句同時投句に限り、6千円を5千円にいたします」
- 前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、お名前、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は普通為替、定額小為替(無記名で)又は現金書留に限る。(必ず作品同封の事)
- 送付先 〒516-0035 三重県伊勢市勢田町851-6 平賀節代方 第57回現代俳句協会/全国大会係 ☎059612516849
- 締切 7月31日必着
- 顕彰 優秀作品を協会の会員誌「現代俳句」に発表するほか、協会刊行物に採録。
- 賞 大会賞、後援団体賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。
- 全国大会
令和2年10月25日(日)午後一時より、「名鉄ニューグランドホテル」〒453-0015 愛知県名古屋市椿町6-9 JR名古屋駅太閤通口(新幹線改札)徒歩一分 ☎052-45215511
- 記念講演 斉藤吾朗先生(画家)
「モナ・リザからのおくりもの」
- 講師 中村和弘会長はじめ協会幹部
- 後援(部予定) 文化庁、毎日新聞社、読売新聞社、朝日新聞社、中日新聞社、産経新聞社
- 懇親会 午後5時より(会費8千円着席式)

[主催] 現代俳句協会 [後援・一部予定] 文化庁・毎日新聞社・読売新聞社・朝日新聞社・中日新聞社・産経新聞社

季音花

人魚座り 梅澤 佐江

家中の光の束や合格子
くれなるの吹き出す力牡丹の芽
咲き満つるけふを愛しみ椿燃ゆ
宝物殖ゆるバケツや磯遊び
人魚のやうに座る乙女よ磯遊び

花 冷 松井 由紀子

春雷のおつとりと来る村境
さわさわと芹寄り合へる野溝かな
すかんぼや少年口にうすき鬚
「次郎吉」が頬つ被りとる花の土手
花冷や飾らずに行く父の家

春 霞 井上 玲子

南画めく妙義山系春霞
滔々と坂東太郎霞み立つ
テノールの愛の賛歌やヒヤシンス
朝日汲み香り立ちたる雪解畑
歩みそむ稚の冒険たんぼぼ野

つばくらめ 井口 俊晴

つばくらめ街に昭和が甦る
雨連れて今年の燕はやばやと
マスクして行き交ふ犬の散歩かな
本閉ぢてまた読みかけて春の風邪
春の風邪隣の枕気にかかる

蔵の街 森川 義子

暮れてなほ明るき水路柳の芽
芽柳や小舟でめぐる蔵の街
料亭の奢りの庭や柳の芽
合流が大河となるやつくし摘む
道草の虜となりしつくしんぼ

冬ばら

山田美佐尾

暁闇の一葉想ふ若井かな
冬ばらを娘と思ひ目をかける
春の風邪童話の本に涙せり
白梅の名は「雪月花」今盛り
片田舎つくしん坊の天を突く

麦粒腫

大場順子

蒲公英や手にあたらしきパスポート
蒲公英の絮のとびつく少女の背
ほろ苦さかみしめ食ぶる土筆和
総立ちの木の芽が囲む野の仏
木の芽吹き少女にぼつと麦粒腫

一天の青

原田想子

ひたひたと彼岸潮寄せ沖の石
耕して今ほどほどの余生かな
耕せば一天の青にじむ土
縁側に顔揃ひけり草の餅
春月や山裾を汽車一文字

風光る

松宮保人

春浅く戦火を偲ぶ曲輪跡
松明の蛇行何処まで水送り
竹林に初音見えねど未完成
展望は海と湖とや風光る
木造りの車庫新しき燕の巢

北へ行く

矢島

清

喜びをかくしきれない春の川
春鴨に頼すら寄する日の光
記念碑のうしろを飾る藪椿
落椿この胸騒ぎなにかしら
北へ行く別れの手紙春の雨

木の芽どき

上戸千津子

木目込や還暦となり雛人形
枝先の秘めたる色や木の芽どき
休校を憤るかに春の雷
城跡を巡る月日や山桜
山中や春の木霊が纏ひつく

熊のプーさん

野口和子

犬に言ふ赤ちやん言葉山笑ふ
春の陽に熊のプーさん干されをり
露の臺見つけし爺の顔優し
麗らかやロボット掃除機稼働中
屋敷神ひそと庭隅小鳥来る

春の朝

中野

疆

紙雛よ顔ほの白く窓あかり
体操はゆるやかでよし春の朝
休校の学舎を守る桜かな
試着して自分変へたき春上衣
取消せば切符失ひ春の雨

五ミリ

福田千春

鉛筆の芯五ミリに揃へ大試験
啓蟄や空に浮遊の見えぬもの
春寒や今朝の玉子に黄身ふたつ
寄り添うて砂丘のふたり陽炎へる
国訛聞く竹下通り春休

春近し

菅原知子

赴任せし夫の二階の部屋余寒
外厠窓にひとひら春の雪
ポケットに祖母のお守り受験の子
神棚に手合はせ出かけ大試験
碧空を映す溜池春の水

公園暮色

後藤綾子

小振りでも我が家にすぎし沈丁花
芽柳のゆるる姿は遊女めく
人去りし公園暮色に辛夷みつ
白蝶蝶朽木に未練あるやうに
親と子の足跡つけて忘れ霜

吊るし雛

秋山冷子

石垣のあはひたんぽぽ自我通す
バラードカロックの風か吊るし雛
平凡で平和なたつきいぬふぐり
母の味じんわりしみる煮大根
猫に愚痴聴いてもらつて春の風邪

コロナ 西浦千枝子

新調の帽子目深に菊根分け
風光るくねくね続く丘の道
一つ家へ立派な舗装路杉の花
芽吹く枝へきらきらきらり雨の玉
コロナ怖し今日も一人の春炬燵

旅立ち 松山清子

初蝶や決意の北の医学部へ
勉学を解き放たれて春スキ
晴の日の卓に大きな春苺
旅立つ子送りし駅の春時雨
朧月津軽海峡越えしころ

花冷え 野平美紗子

二人して老犬看取る花の冷え
花冷えの唐崎の松けぶりけり
足の指の痺れも忘れ青き踏む
花菜摘みつい指先に力込め
青空に貼りつくやうや糸桜

急告！

全国大会兼題句

締切延長のお知らせ

水明全国大会の延期に伴い、

投句締切日を五月三十日(土)に

延期しますので、

多数ふるってご応募ください。

主宰 山本鬼之介

俳誌望見 梅澤 佐江

『麻』 令和二年二月号 通巻六二二六号

主宰 嶋田麻紀 発行所 茨城県つくば市

昭和四三年一月、菊池麻風が東京都中野区で創刊。師系は渡辺水巴。「麻のような直ぐなる心で俳句を愛す」を理念とする。(月刊)

主宰句「つくばね集」一七句より

日脚伸ぶ片減り靴を買ひかへむ

春はもうすぐそこに、(片減り靴)の措辞が巧みで、そろそろ春色の靴に買い替えようという心理描写が見事に表されている。

酔茎噛みふだんの心取り戻す

神経の苛立つ日にお茶を飲み乍ら、過日京都で求めた酔茎漬を噛みしめると、その折に礼拝した半跏思惟像の優しい微笑みを思い起こし穏やかな心持になれたのである。

短冊は浅黄を選び実朝忌

買物の折、ふと源実朝の忌に思いを致し買う短冊を取えて鎌倉の明るい海の色の浅黄としたところに作者の心象の深さが読み取れる。

春めくや釦の糸のゆるび初む

万象いきいきとして肌に触れる空気にも春の気配が、(ゆるび初む)の心憎い座五、冬中馴染んだ服の釦の糸の緩みが眼目であり春を迎える喜びを凝縮させている。

見張役は一羽群れなす春の鴨

北の故郷へ帰るのは今日それとも明日と合議中なのか、その間も一羽の見張りを立てる秩序の良さ、コロナ禍の間社会も総じて斯く有りたいたいものだ。

あかね集 三三名 各五句より 二名を一句ずつ

公現祭枯れの根が知る日のぬくみ 松浦 敬親

咲くもののひそと残れる枯野かな 鈴木 了齋

あさのみ集 五一名 各三句より 二名を一句ずつ

撃つて来て喰はせし昔牡丹鍋 小林 洋介

定型を持たざる熱き葛湯かな 庭野 治男

あさ集 六一名 各五句から二句より 二名を一句ずつ

縁側に湯吞が二つ冬日向 加藤 操

冬晴れを褒めて庭師の三時かな 染谷三千子

鋭い観察からの深い洞察、心を溶け込ませた人間諷詠が心理描写を感性豊かにしている。

編集長・松浦敬親氏の長期連載「芭蕉革命―芭蕉キリシタン類族説への道―」第二〇六章 埋木の法則(160)』は博覧強記と見識の高さに圧倒された。最も驚いたのは『俳句における虚構』に対する疑問と反論で、同人の安方墨子氏の論説に、同人論客の佐藤たけを氏が二頁余に及び微に入り細を穿ち反論をしており、これに異議があれば墨子氏の再反論を受けて立つというものであった。更に末尾には佐藤たけを氏の反論に対して編集長・松浦敬親氏のコメントが「混線と脱線」で一頁付記されているのである。編集の有り様と誌面の構成も他の結社とは些か違うが、『麻』の俳句に対する真摯な姿勢と熱情には頭の下がる思いである。

現代俳句鑑賞

網野月を

呪文ひとつとなえて食べる桜餅

白戸 麻奈

〔俳句四季〕 3月号・東京の一隅でより〕

座五の季語「桜餅」は春の生活のジャンルに入る。江戸時代から庶民の生活に馴染みのある菓子である。それだけに家庭生活その他の中で食され方も親子代々の仕方があり、また当事者ならではのルーティーンがあるものである。どんな呪文であろうか？興味はそちらへ引きずられてしまふ。筆者の愚考するところではポジティブな志向の事柄のように感じる。「桜餅」のもつイメージがそうさせるのである。

太古より 日輪遠き 堇かな

林 桂

〔俳句四季〕 3月号・葦まで紀行より〕

作者は現代俳句の最前線を疾走している作家である。ぜひとも水明諸兄妹には注目して頂きたい作家である。

全句にルビがふられている。見た目にも特異であるのだが、表現世界のテーマ性や一句一句にオーダメイトされた作法もオリジナリテイ豊かである。他に「花水木朝から風のかなか」がある。

石けんを溶かせば濁る水も春

才野 洋

〔俳句界〕 3月号・三月より〕

難しい技法を駆使して作句している。句意は十分に理解されているのに、奥行きもまた十分にあつて、いわゆる深読みの出来る句なのである。春の水の性向をよく表していて、その春の水に包摂された作者の句の世界というか、構成された世界観が表現されているのである。他に「女の子から男の子へ春の風吹けり」がある。

蛇穴を出てスクランブル交差点

徳吉洋二郎

〔俳句界3月号・虚と実〕より〕

「蛇」の擬人なのか、もしくは蛇の世界にも「スクランブル交差点」のような空間が存在するのか。後者ではないかと筆者はある種の期待を持つて想像する。他に「恋文に賞味期限なし涅槃雪」がある。

雨の匂させて恋猫帰宅する

森須 蘭

〔俳壇〕 3月号・春景より〕

この「恋猫」は雌であろうか？雄であろうか？「雨の匂させて」の措辞が句の物語性を助長している。一句仕立ての作

法なのであるが、五七五のリズムで読めるので、座五の「帰宅する」の展開に不穏なものが感じられずに、作者の飼い猫への愛情がそれとなく表現されている。他に「会釈するだけの隣人沈丁花」がある。

素読する冬濤を噛むかぶと蟹 並木 邑人

〔俳句〕 3月号・素読より〕

上五の「素読する」は作者を主語としても読めるし、連体形と解して「冬濤」もしくは「かぶと蟹」に繋げて読むことも出来る。「素読する」は本来人の行為であるので、普通なら作者を主語として読むのが順当のように考える。とすれば「素読する」ということが、つまり作者にとっては恰も中七座五にある「冬濤を噛むかぶと蟹」のようだとはいっていることになる。かぶと蟹が敢えて冬濤を噛もうとすれば、濤の力によって裏返されてしまうのではないか？そこまで推理すると、作者にとって「素読」がいかに峻烈な行為であるか想像される。呈示された行為を解釈するのは読者に委ねられているように思う。

雨月なり舌で突きたる盆の窪 曾根 毅

〔俳句〕 3月号・月読より〕

一般的に考えれば自分の「盆の窪」を自分の「舌で突く」ことは出来ないものであるから、誰か他人の「盆の窪」を突いたことになるのかも知れない。ただ上五の季語「雨月なり」が一種の状態としての条件を呈示しているとすれば、作者と

その誰か他人の関係性を合わせて読むことになる。叙されている景をどう読むかは読み手に任されているように考える。もしかしたらピカソの絵のように自分の舌で自分の盆の窪を突いているのかも知れない。

殺したい奴も重度の花粉症 久留島 元

〔俳句〕 3月号・早春賦より〕

座五の季語「花粉症」は時空間の呈示と、意味性の呈示をしている。句には意味性が強く表出されている。とすれば中七の「も」によって指定される他の誰かは、自分かそれとも自分以外の不特定多数の存在なのか？句には明示されていない。「殺したい奴」は「花粉症」というスライドをかけると「も」で暗示される存在と同一性を共有していることになる。

昼飯は食べた木犀掃きに立つ 関根 誠子
バス降りて昔の道が炎天下

〔句集「瑞々しきは」より〕

前句は日常を切り取って二つの行為を並べているのだが、この組み合わせによってどちらの行為も限定され、特別な時間×空間×意味を表現することになる。作者の個性が放つ際立つ技法である。後句は、中七の「昔の」は作者にとってのメモリアルなものというみであるかと筆者は解した。決して意表を突いているわけではないのだが、「炎天下」はこの句の座五に置かれるとグッとその存在感を倍増させているようだ。景がセピア色になった気がする。

句集「瑞々しきは」は三月に出された作者の第三句集である。

令和二年

水明賞

正木 萬蝶
近藤 徹平
大塚 茂子

令和二年

季音賞

大場 順子
山田 美佐尾
森川 義子

山本鬼之介

選考経過

◆水明賞◆

令和二年の水明賞は、令和二年三月三日の水明賞選考委員会において選考し決定した。選考委員会では、前年の水明集で巻頭を取った十一名の作家を候補者として選び、各月の作品の出来映えや順位、更に、十月号での夏季競詠の順位も審査の対象として、各候補者について全委員が十二分に意見を述べ討議を重ねた結果、正木萬蝶・近藤徹平・大塚茂子の三名に授賞することを決定した。今年七月号より、季音「花」欄の作家として更に精進され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層発揮した優秀な作品を発表されることを大いに期待している。

◆季音賞◆

令和二年の季音賞は、令和二年三月三日の季音賞選考委員会において選考し決定した。選考委員会では、前年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者として選び、候補者について委員から充分に意見を述べ合い討議を重ねた結果、大場順子・山田美佐尾・森川義子の三名に授賞することを決定した。今年七月号より、季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけると共に、後輩の指導にも心配りをしてもらうことを望んでいる。

令和二年

かな女賞

矢作水尾

令和二年

新珠賞

日高徹
染谷正信
梅澤輝翠

山本鬼之介

選考経過

◆かな女賞◆

令和二年のかな女賞は、三月十日開催の常任幹事会において、主宰・山本鬼之介より、矢作水尾に令和二年のかな女賞を授賞したい旨を表明し、一同の賛意を得て決定した。

受賞者・矢作水尾氏は、娘時代に長谷川かな女に師事する機会を得たことを契機に、九十歳を超えた現在まで、水明一筋の俳句活動を継続してこられた。その真摯な努力と、永年水明誌上に発表の秀逸な俳句作品、更に、季音「雪」欄の作家として多くの後輩に佳き手本を示し、水明俳句会の活性化に多大な貢献をなされていることを高く評価し、かな女賞の受賞者に相応しいと判断した。

◆新珠賞◆

令和二年の新珠賞は、令和二年三月二十一日の新珠賞選考委員会において選考し決定した。選考委員会では、予選を通過した十二編の候補作品について、各委員が、推薦する応募作品に順位を付けて発表する作業を繰り返し、推薦委員の評価も加えて協議を重ねた結果、日高徹に加え、作品の内容が優秀であった染谷正信と梅澤輝翠を加えた三名に授賞することを決定した。この慶事を契機に、次の目標に邁進してもらいたい。

水明賞 正木 萬蝶



受賞のことば

連日の新型コロナウイルスの報道で雛祭りの気分の薄れていた三月三日の夕、鬼之介主宰より「水明賞おめでとう」のお電話を頂きましたが嬉しさと驚きで言葉に詰まってしまいました。

出発点は横浜水明、当時は仕事が忙しく思うように出席出来ず投句と句友の皆様の励ましで続ける事が出来ました。仕事を減らし若松句会、東京水明等でベテランの方々に採まれ俳句の奥行と面白さを体感すると共に挫折感も味わいました。

「やっつて良かった〇〇式」という塾のCMがあります。が、「やっつて良かった五七五」継続は力なり、とつくづく実感しました。

時には皆様と美味しいものを頂きながら自分らしい俳句作りを楽しみたいと思います。

これからも鬼之介主宰の厳しくユーモアのあるご指導を引き続き宜しくお願い致します。本当にありがとうございます。

▼受賞対象句抄

初弥撒のひとり野太きへブライ語
大寒のスパームーン人魚死す
野火猛りふつとお七の影よぎる
姨捨の裾野を列の遠足子
明易や廊下の長き妻の里
百合の香に折檻されしひと日かな
母に見え父には見えぬ日雷
結界へ風生臭し踊唄
校長に物を借りたる運動会
凍雲や防人の歌譜んずる

水明賞

近藤 徹平



受賞のことば

〈略歴〉昭和十一年奈良県生。
平成二十五年四月水明入会。平成二十七年同人。平成二十七年水明八十五周年記念俳句準賞。平成二十八年新珠賞。水明熊谷句会、俳句の手ほどき、第一例会、現代俳句協会会員。

三月三日の夜、山本鬼之介主宰からお電話で水明賞に選定のご連絡を戴きました。その瞬間嬉しさの余り何と答えたら記憶がありません。お話を伺いつつ「まだまだ実力不足なので、今後は一層、指導ください」と、答えていました。これには訳があります。平成二十五年中学校同級生の福田藤十郎君から「熊谷句会を立ち上げるので参加しないか」と誘われ、直ちに参加しました。当時の私は俳句の経験が全くなく、喜寿からの出発で生き急いでいました。新珠賞の存在を知り、不遜にも実力検定の意味も含め平成二十七年に応募、翌同二十八年再挑戦し、新珠賞を有難く受賞しました。

その後になって俳句の奥深さを、つくづくと知りました。自分では名句と思っても、誰も共感してくれない場合が殆どです。作者と読者が共感し合える句を目指す。この道は甚だ遠く、私の余生は全く不十分です。主宰、選考委員の先生方、同人、会員の皆様、今後ともよろしくご指導ください。

▼受賞対象句抄

冬構終へて手締めやダム現場
迷ひ人の行政無線障子越し
わけもなく踏みにじらるる霜柱
乗り手なき回転木馬寒戻る
キューポラの失せたる街を春霞
ノーサイド大の字に寝る春の芝
春惜しむ離れ座敷の三次会
せせらぎの風を味はふ鮎の宿
海霧深し生まれ故郷は今他国
秋灯下キーポトルの千社札

水明賞

大塚 茂子



〈略歴〉昭和二十年埼玉県生。
平成二十六年水明入会。平成
二十九年同人。新珠賞。
水明熊谷句会、野ばらの会、櫻
蔭句会。
現代俳句協会会員。

受賞のことば

お雛様の日、高校生の孫と手巻寿司を作っていました。そこに主宰からのお電話「茂子さん水明賞に決まりました。おめでとう。」あまりにも突然で「ええっ」と言ったまま、言葉を失いました。「ありがとうございます。」の一言が精一杯でした。戸惑いが大きくてどうしようかと何度もつぶやいていました。

俳句歴も短く自分の語彙の狭さ、感覚の鈍さを痛感しておりますが、この水明賞を区切りに、仕切り直して俳句を生涯の友として、専念したいと思えます。

主宰はじめ、選考委員の皆様、諸先生方、句友の皆様誠にありがとうございます。

これからも御指導よろしくお願い申し上げます。

最後に私を俳句に誘って下さった、加藤草太郎様、遠くから見守っていて下さい。ありがとうございます。

▼受賞対象句抄

安達太良の智恵子の空は花曇
尾長跳び一気に散らす八重桜
さくらんぼ一人ベンチに初潮の子
月の夜や折戸に光る蜘蛛の糸
日盛のホースで洗ふ象の皺
孟蘭盆会寡黙な兄がうどん打つ
ペン先を登る記憶や秋の潮
海面に鴟の音跳ぬる舟下り
初明り天地返し土の影
霊園に千の角あり沈丁花

季音賞 大場 順子



〔略歴〕昭和十九年山形県生。
平成二十一年水明入会。二十四
年同人。二十七年新珠賞。
二十九年水明賞。
第一例会、第三例会、第四例会、
大宮読売俳句教室。
現代俳句協会会員。

受賞のことば

三月三日の雛祭の夜に主宰より「季音賞」受賞のお電話を頂きました。私がいただいて大丈夫かしらという思いも過りましたが、やはり嬉しさが込み上げて来ました。

鬼之介主宰、順子先生、美代子先生、諸先輩、句友の皆様本当に有難う御座いました。又水明入会以来十年間ご指導を賜りました故光二前主宰に深くお礼を申し上げます。

俳句を続けていると年度知らなかった言葉と出会い意味が解るとその奥深さに感動し日本語はいいなと思います。句会の兼題は季節を先取りしているので詠んでいるうちに一年があつという間に過ぎます。気を引き締めて追い掛けていきたいです。

水明創刊九十周年の記念すべき年に受賞出来ましたのを名誉な事と思います。選考委員の皆様には心より感謝致しております。

これからも主宰、先生方、句友の皆様、ご指導の程宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

春立つや唐三彩の馬の色
リバーシブルの衣を裏返し竹の秋
花冷えやしまひしままの舞扇
時の日の銀座を統ぶる時計塔
ハンカチに今日のと きめき折り込みぬ
待ち人の現れて噴水高上がり
鑑真の海穏やかに飛魚渡る
鯨の尾の反り美しき十三夜
駆け寄りし犬に枯野の日の句ひ
半顔に朝日をとどめ弓始

季音賞 山田美佐尾



〔略歴〕昭和七年東京生。
平成六年水明入会。平成十五年
同人。平成二十七年季音同人。
第五例会、俳句の手ほどき、桜
林句会。
浦和俳句連盟会員。

受賞のことば

お雛祭の夜「ちらし鮭」を作っているとき、鬼之介主宰より「季音賞」に選ばれました。お目出とう。と電話を頂きました。

突然の事なのですぐにはのみ込めず「本当ですか：ありがとうございます。」と申し上げます。と申し上げるのがやっとでした。私はどちらかと言うと登山や水泳とか体を使う方が好きで、俳句とは無縁でした。心機一転俳句を始めることにしました。まず俳句教室、次にいくつかの句会に入れて頂きました。

これまで御指導を受けた先生は、鬼之介主宰、美代子先生、故紗一先生、故光二前主宰、故春邑子先生です。本当にありがとうございます。

又句友の皆様の暖い繋がりで現在に至っております。これからの残る人生を俳句を物として参りたいと思います。

最後に選考委員の皆様は、心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

▼受賞対象句抄

結願の杖そつと置き冬ぞくら
余寒かな白を極むる天守閣
絶筆の城主の文字や余寒なほ
水仙のその一本は剣のごと
きり岸の水仙海へ迫り出せり
椅子一つ西洋館の芝青む
緑蔭に研ぎ師砥石に水伸ばす
何も置かぬ新涼の青畳
それ故に二人は添へぬ近松忌
秋の海千尋の底に御紋章

季音賞

森川 義子



〔略歴〕昭和十二年香川県生。
平成十年水明入会。平成十五年
水明同人。
平成二十八年新珠賞受賞。平成
三十年季音同人。
第五例会、俳句の手ほどき、た
かな俳句会。

受賞のことば

三月三日桃の節句のにぎやかな宵でした。主宰より季音賞のお知らせを頂きました。突然のことでしたので「えっ私ですか」と驚きました。信じられない出来ごとに「有り難うございます」と申し上げるのがやつとでした。今回は伝統ある水明創刊九十周年という大きな節目の年に身に余るこの様な賞を頂き身の引き締まる思いです。

顧みれば俳句の基本からご指導頂きました故人になられた久代先生、貴譽子先生、光二前主宰、句友の方々の支えがあったればこそと実感しています。改めて皆様にご心より感謝申し上げます。これからも自身の健康と向き合いながら日々楽しく俳句と遊ぶ時間を続けたいと思っています。
鬼之介主宰始め諸先生方、句友の皆様、宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

逍遙の先へ先へと紋白蝶
三月や昭和の句ふ折記号
待望の男の子誕生芝萌ゆる
遠雷や衣桁の帯のくづれ落つ
風鐸に千年の鏗竹の春
絶筆の友の玉章白桔梗
菊月や永字八法説き論す
急坂にバスつんのめる紅葉狩
山粧ふ六歩で渡る丸木橋
飛車取の駒のひびきや白障子

かな女賞

矢作水尾

受賞に思う

〔略歴〕昭和三年神奈川県生。

昭和二十二年水明入会。平成十年再入会。平成二十一年季音同人。平成二十七年功労賞。平成二十八年季音賞。令和元年雪欄第五例会、柿の木塾、俳句の手ほどき、たかな俳句会、珊瑚の会。



三月というのに四月の陽気、明日は桜の開花という声
が流れる朝、主宰より「かな女賞授賞です」とお電話を
頂いた。思いもかけない事なので、「私ですか」びつ
くりと、驚きと、受賞の重さをひしひしと感じ、しばらく
してから「お受けします」と言うのがやっとでした。

七十年前実家のある真鶴に、長谷川かな女先生の御指導を
に來られた。そしてある御縁で、かな女先生の御指導を
受けることになりました。当時は戦後のことで、社会は
まだ落着かず飢えを凌いでいた時代でした。その時「か
な女先生」に頂いた俳号「水尾」を使わせて頂いていま
す。二年後先生は浦和へ帰られ、その後は投句していま
した。しかし横浜へ遠距離通勤となり、何時の間にか途
絶えてしまいました。川口へ嫁ぎ再入会し、紗一、光二、
鬼之介主宰、順子先生の御指導を受けました。

思いがけなく昨年は「雪欄」へ昇欄。そして今回の「か
な女賞」受賞の重みを大切に一層、努力したいと思いま
す。幸いにも元気に句会に出席出来ます日々をありがた
く感謝しております。

主宰、順子先生、句友の皆様、これからも御指導の程
よろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

新珠賞 日高 徹



〔略歴〕昭和二十五年埼玉県生。
平成二十八年水明入会、三十年
水明同人。りそな俳句会、芽吹
句会、新樹の会、円卓の会
現代俳句協会会員

受賞のことば

この度は、令和二年度の新珠賞の受賞、心より御礼申し
上げます。

平成二十八年に水明俳句会に入会させていただいて以来、
星野光二前主宰、山本鬼之介現主宰には、直接ご指導を賜
る機会を多々いただき、またりそな俳句会はじめ、芽吹句
会、新樹の会、円卓の会の先輩、句友の皆様との句会での
意見交換や、水明各行事で一緒にさせていただいた句友の
皆様との交流を通じて、私をこのように伝統ある賞を受賞
できるまでに育てて頂いたものと存じます。

この受賞に恥じぬよう、今後さらさらに精進に努めてまい
りたいと思っております。

また結社の繁栄にも微力ながら貢献してまいりたいと思
っております。

この度は誠に有難うございました。

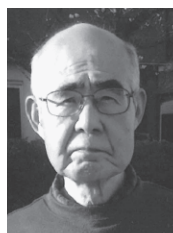
▼受賞対象句

小江戸冬景

寒晴や小江戸で拝む富士真白
裏窓に聖樹と少女蔵の街
虎落笛棒つきの館二つ買ひ
つはものの生死を分けし白襖
雪催息を潜むる御神木
淑気満つ午前零時の時の鐘
初 明 り 力 漲 る 鬼 瓦
女 正 月 貸 衣 装 屋 に 外 国 語
初 大 師 鳩 も 並 ぶ や 氏 子 中
鯛 み く じ 大 吉 釣 れ て 初 笑 ひ
寒 の 入 父 似 の 羅 漢 見 っ け た り
福 詣 御 朱 印 帳 に 令 和 の 字
松 過 や 姫 の 唄 ふ 「 通 り や ん せ 」
左 義 長 の 人 は 紅 山 は 閨
春 を 待 つ 一 番 街 に K O E D O の 香

新珠賞

染谷 正信



〔略歴〕昭和二十二年埼玉県生。
平成二十七年水明入会、三十年
同人。大宮読売俳句教室、コク
ーンシティーカルチャー俳句教
室。現代俳句協会会員

受賞のことば

この度の新珠賞受賞にあたり、山本鬼之介主宰を始め、大宮読売俳句教室、コクーンシティーカルチャー俳句教室において御指導頂いております山中順子先生、境延昭先生、及び共に研鑽を積ませて頂きました両句会の皆様により感謝申し上げます。

思い起せば平成二十七年六月に、大宮読売俳句教室に入会し、星野光二前主宰より俳句の「いろは」から教えて頂きました。同教室は「楽しい俳句」がモットーであり、句会終了後の近くのレストランでのコーヒータイトムが何より楽しみでした。そこでの自由な雰囲気の中での先輩諸氏との屈託のない会話は、俳句初心者私の私にとりまして大変貴重な時間であり、俳句に対する興味を更に深める時間でもありました。

今回の受賞を新たな出発点として、これからも俳句の道に精進いたす所存です。

主宰を始め、水明の先輩諸氏、句友の皆様、今後とも一層の御指導、御鞭撻をお願い致します。

▼受賞対象句

生命讃歌

春めくや利根の堤を一万歩
種袋振つて命の音を聴く
煩惱は生きをる証万愚節
廊下這ふ赤子の尻へ若葉風
青空の如き未来を鯉幟
炎昼や浜の男の子は赤ふどし
七夕竹平和を願ふをさな文字
ひいまごの酌で一合生身魂
農捨てし長子に届く今年米
晩学のアテネ・フランセ秋灯下
夕照の煉瓦の駅舎枯葉舞ふ
地球儀をリボンで結び降誕祭
冬木の芽目下飯免練習中
早暁の叱咤の怒号寒稽古
高麗人の拓きし里や梅探る

新珠賞

梅澤 輝翠



〔略歴〕昭和二十年新潟県生。
平成二十八年水明入会（第一回、
第三回初めての俳句教室卒業）
令和元年同人。青葉の会、雛の
会。現代俳句協会会員

三月二十一日夕刻、主宰より「入りましたよ」うん？えっ！何に一瞬意味が解りませんでした。

新年食事会の折に、勉強の為に新珠賞応募してみようかと思えます。と主宰に話しました。「いいね、ぜひ」とおっしゃって頂き、それからの取り掛り。始めての応募故どのようなご指導を頂けるかと思っておりました。

まさかの出来事、「エー、びっくりで信じられなくて、腰が抜けた様です」とだけ伝えて、多分お礼の言葉は言えてなかった様に思います。改めまして鬼之介主宰、選考委員の皆様、ありがとうございます。

入会から右も左も解らない私にご指導下さいました鬼之介主宰、順子先生、そして昨年より心よく仲間入りさせて頂きました雛の会の先輩の皆様、四年間共に切磋琢磨して下さいました句友の皆様、そして事あるごとに一緒にさせて頂きました句友の皆様、本当にありがとうございます。

この受賞を糧として、心新たに精進して参ります。今後ともご指導宜しくお願い致します。

▼受賞対象句

海は産む

灯台に登りし童女春の風
びつしりと青びかりする鯛の網
お櫃も積んで漁師の父子鱈漁
縄文の頃も咲きしか山の藤
夕陽落ち水着の少女沖目ざす
女等が波にただよひ夏の月
いかづちの光砕けて佐渡島
烏賊釣りの光の海へ流れ星
巫女が舞ふ夕日の浜の秋祭
浜茱萸を両手に余しポケットに
いにしへの鮭漁守る城下町
灰色の空にとけこむ冬の海
けちらして除雪車が行く夜明け前
楫を軒に差し込む北の国
新年の膳に賑はふ海の幸

それでも桜は咲く 山中 順子

先ず受賞された、日高 徹、染谷正信、梅澤輝翠三氏に心より拍手を贈りたい。今思えばこの俳句を作っている時はまさかこんな事態になるとは思わなかったでしょう。だから作品12編にコロナが現れないのが救いである。

「小江戸冬景」

日高 徹

小江戸といえは埼玉は川越をいう。

寒晴や小江戸で拝む富士真白

荒川の橋を渡ると左方向に雪の富士が大きく見えてくる。小江戸で拝むがこの十五句の幕開けとなる。

虎落笛棒つきの飴二つ買ひ

鯛みくじ大吉釣れて初笑ひ

寒の入父似の羅漢見つけたり

酒井・松平氏らの城下町として繁栄した埼玉県の中心都市であるから観光の目玉として年間の行事は数多い。私も関東に出て来たのは川越なのでこの三句はなつかしさに思いが走る。「二つ買ひ」が意味深長。

春を待つ一番街にKOEEDOの香

ローマ字の洒落が心憎い演出。昨年の選考文の約束の期待に満足した。

「生大命讃歌」

染谷 正信

種袋振つて命の音を聴く

廊下這ふ赤子の尻へ若葉風

炎昼や浜の男の子は赤ふどし
題名から四字熟語は片苦しいので十五句もそうかなと思つたが、何時になく作者の一面を見た。日頃の句会では訳の分らない句の時があるが、それは理由があった句意という。だがこの十五句はそれが削がれている。

晩学のアテネ・フランセ秋灯下

高麗人の拓きし里や梅探る

句会で兼題が出ると時間をかけて確めに行く熱心さは羨ましい。それでこそ写生の中から探り当てた生命を見つけることが出来た受賞句だと思ふ。まだまだ伸びる可能性を十分に持っている新人です。楽しみの宝です。

「海は産む」

梅澤 輝翠

灯台に登りし童女春の風

お櫃も積んで漁師の父子鱈漁

夕陽落ち水着の少女沖目ざす

巫女が舞ふ夕日の浜の秋祭

作者は新潟の生まれ、しかも日本海に近いところと伺つた。私は山国信州なので海へ行くには日本海であった。つい最近日本海の夕日やら魚を食べに旅した事が思い出される。

灯台に登つた少女、父兄でお櫃ごと積んで父子の対話、薄暗くなくても泳ぐ少女。そして浜の秋祭。よく読むと過ぎた自分をもう一度掘りおこした句であるが、今に持つて来た度胸と記憶に拍手を送りたい。日が浅い句友であるが、大物になる手応えは充分にある。このまま一歩も二歩も進んでほしい。

よしよしと母に誉めらる春の夢

雲水の草鞋の先に村時雨

これから期待出来るので来年こそを。

杉浦 理恵
神田 治江

選を了えて

茂木 和子

今年は無曾有とも云うべき時の疫に見舞われた年明けとなった。それにもめげず新珠賞に挑戦し見事射止めた三名の方に心からお祝いを申し上げる。

寒晴や小江戸で拝む富士真白

日高 徹

淑気満つ午前零時の時の鐘

川越の街中からは仲々富士山は見られないと思うが、ここで富士山を発見した事は鋭い俳句の目、そして午前零時の「時の鐘」に作者の身の引き締まる緊張感が伝わって来る。

女正月貸衣装屋に外国語

寒の入父似の羅漢見つけたり

最近は何外国人の和服姿を良く見かける。着せ替え人形の様でしつくり来ないが御本人達は大満足、皮肉も交えた軽味的一句。喜多院の五百羅漢は有名で「見つけたり」の措辞により父への思いが深まり感慨一入。

春を待つ一番街にKOEEDOの香

「春を待つ」のフレーズで季節の春は元より小江戸を敢えてローマ字にした事でここから何かを変え、何かが変わるその何かを発信したい作者の内面を垣間見た様な気がする。句中の「氏子中」「KOEEDO」の表現に工夫が欲しい。

題名を小江戸の冬に絞りさらりと無理のない詠み方がとても良かったと思う。常に前向きな作者。益益の御研鑽を。

種袋振つて命の音を聴く

染谷 正信

廊下這ふ赤子の尻へ若葉風

種袋を振つて命の音と感じた作者の感性。私は題名から考えて胎児の心音と思った。そして生まれた子の尻に吹く若葉風の何と清々しい事か。

炎昼や浜の男の子は赤ふどし

生長した赤ふどしの男の子は作者自身か。

晩学のアテネ・フランセ秋灯下

高麗人の拓きし里や梅探る

年を経ても学び歴史を探る作者の生きている証しとしての生命讃歌であると思った。

灯台に登りし童女春の風

梅澤 輝翠

夕陽落ち水着の少女沖目ざす

「海は生む」まず、この題名に新鮮さと大胆さを感じた。海の生活を知らない人にとって全くの未知の世界である。夕陽が落ちてから沖を目差す勇敢さと健康優良児そのままの少女が眩しい。

灰色の空にとけ込む冬の海

「灰色の空にとけ込む冬の海」この大胆な表現は実生活の中で経験し、実像として作者の中に描かれている風景である。

新年の膳に賑はふ海の幸

海育ちの作者でなければ分り得ない実体験に基づく力強さがある。新珠賞にふさわしい新鮮味を感じた。今後とも作者の持っている個性を大事に育てて行って欲しいと思う。

竜になる鯉

境

延昭

古く中国の史書で黄河の急流を登り切った鯉こそが竜になるとの謂れから「登竜門」は挑戦の最初の関門を意味する。水明の登竜門こそが新珠賞である。他の賞と違って、既発表作品の総合評価でなく応募作品の絶対評価で決する。先ずは作者自身が挑戦の意欲を持つことが肝心である。ここ数年、応募の数が極端に少ないのは残念である。選考に当たっては応募十五句の出来は勿論、テーマ性そしてタイトルを重視する。見事賞を射止めた日高徹「小江戸冬景」染谷正信「生命讃歌」梅澤輝翠「海は産む」の三氏に大いなる祝福を送りたい。三氏は水明入会四年前後ほぼ同じキャリアである。俳句が面白くて仕方ない時期であろう。竜となり、今後ますますの活躍が楽しみである。

日高徹氏は場所を川越に限定の上、冬季に絞り込んで十五句を仕上げた。そのこともあってタイトルと句のまとまりにおいて他を圧倒した。何度か足を運んだ努力が窺える。作品を仕上げる集中力、句作りの力量は見上げたものである。

裏窓に聖樹と少女蔵の街

日高 徹

淑氣満つ午前零時の時の鐘

福詣御朱印帳に令和の字

春を待つ一番街にK O E D O の香

染谷正信氏の「生命讃歌」は生命をテーマに十五句を詠んだ。勉強家で知識欲旺盛な作家が観念を離れ、具象性を持たせて詠もうとした努力を賞う。しかし努力は抑制を強いることではない。持ち味の奔放な着想は魅力である。

廊下這ふ赤子の尻へ若葉風

染谷 正信

炎昼や浜の男の子は赤ふどし

地球儀をリボンで結び降誕祭

高麗人の拓きし里や梅探る

梅澤輝翠氏「海は産む」は海をテーマに纏まりがある。体験したものの故のリアルな表現に。氏が日本海沿いの出自であることを知る。産土賛歌の作品でもある。古い記憶や体験を過去に埋没させることのない技量はさすがである。

お櫃も積んで漁師の父子鱈漁

梅澤 輝翠

烏賊釣りの光の海へ流れ星

巫女が舞ふ夕日の浜の秋祭

灰色の空にとけこむ冬の海

今回残念ながら受賞を逃したものの、注目した句を挙げておく。やがて竜になる日を目指して、日頃の句会を楽しみつつ研鑽を続けてほしい。

手際よく花鳥賊捌く漁師妻

田中 章嘉

陽炎を見つつ女の嘘をさく

新 曆文

鞆や空を蹴り上げ無重力

反町 修

帯を解く音のかそけし春の闇

神田 治江

選評 網野 月を

今年の応募作品は叙景に徹した句作りが多かった。作句の叙法においても、また句意の深さにおいても工夫の感じられるものばかりであった。予選、そして推薦委員の選を経て選考会では、各委員から順位を付けた五作品が報告された。その後、鋭意論議が重ねられ、三作品が受賞作と決まった。

応募作品は新珠賞ならではの清新な作品が並んでいて、時にギョツとし、また苦笑いする作品があったが、大多数は真面目に取り組んでいることが分かる作品であった。敢えて苦言を呈すれば十五句揃えるために加えたらしき句が有ったり、誤字も散見される。余裕をもって応募したいものである。

次に受賞作品の中から特に優れていると筆者が考える作品を掲げて鑑賞致します。

つはものの生死を分けし白襖
寒の入父似の羅漢見つけたり

日高 徹

全体的に安定感抜群の句揃いというのが印象であった。季語の前後に切れを作って、季語を独立して使用する叙法が多数を占めている。この叙法に拠ってリズム感を作り出しているのである。その中で前句は座五の季語「白襖」に一句仕立てて繋げて作句している。畳みかける仕方が句意にびったりである。他に季語を関係づけで使用している作法の句に「聖樹」と「左義長」がある。リズム感の異なる句を三カ所に配

して十五句全体の籜をはめたような構成にしている。後句は作者の心情が滲み出ている句であって、俳句の王道である即物的叙法の典型とも言える作法であろう。

廊下這ふ赤子の尻へ若葉風

染谷 正信

地球儀をリボンで結び降誕祭

水明集その他で拝見する何時もの作者の句とは印象の異なる句が並んでいた。十五句を揃えるための工夫と想像している。座五の季語「若葉風」の幹旋は絶妙であるが、それ以上に這い這いする「赤子」を「尻」で把握している点は将に俳句的である。似顔絵描きがその特徴を捉えるに似ている。後句はクリスマスプレゼント用にリボンを結び付けた「地球儀」を用意したのだ、と筆者は解した。好句である。

灰色の空にとけこむ冬の海

梅澤 輝翠

けちらして除雪車が行く夜明け前

前句は全十五句の秀抜句であろうと筆者は考える。海の景はその日その時刻で様変わりするものである。その一瞬を捉えている。時間を止めて活写する句作りの巧みである。通常は空の色合いが海へ溶け込むのだが、前句は逆の様である。後句は上五の「けちらして」の動詞の用法に技がある。他動詞であるから目的語を取るのだが、「雪」と分かっているのので省略したのである。この省略に句の余韻が生まれるのだ。「除雪車」の字の重なりも避けることにもなった。

他の応募句にも秀句が多い。他欄にて拙文を寄せさせて頂きます。

意中有人

五明 昇

水明俳句会の登竜門である「新珠賞」応募作品十二編の中から見事に受賞の栄に輝かれた日高徹、染谷正信、梅澤輝翠の三氏に心からお祝いを申し上げたい。

○日高 徹「小江戸冬景」

淑氣満つ午前零時の時の鐘

初大師鳩も並ぶや氏子中

寒の入父似の羅漢見つけたり

松過ぎや姫の唄ふ「通りやんせ」

春を待つ一番街にK O E D O の香

日高氏の作品は冬の川越に焦点を絞り、小江戸のさまざまな情景を詠んだもので、題も的確で構成に優れ文字も端正で好感が持てる。掲句は川越のシンボル「時の鐘」、正月三日の喜多院「初大師」、境内の「五百羅漢」、わらべ唄発祥の「三芳野神社」、ご当地の地ビール「K O E D O」を句材に、今に残る蔵の街の魅力を巧みに活写している。

○染谷 正信「生命讃歌」

廊下這ふ赤子の尻へ若葉風

炎昼や浜の男の子は赤ふどし

ひいまごの酌で一合生身魂

農捨てし長子に届く今年米

地球儀をリボンで結び降誕祭

生きとし生けるものの「生命」の素晴らしさを多角的に詠み上げた作品で、先を見据えた明るい作風に感動を覚える。廊下を這う赤子の尻や浜の男の子の赤禪はまさに生命の躍動そのものだ。ひいまごの酌で飲む酒や、農を捨てた長子に届く新米の味は感慨もひとしおである。紛争や災禍の絶えない地球に幸多かれと願う者は作者のみではあるまい。

○梅澤 輝翠「海は産む」

びつしりと青びかりする鯛の網

お櫃も積んで漁師の父子鱈漁

いかづちの光砕けて佐渡島

いにしへの鮭漁守る城下町

新年の膳に賑はふ海の幸

故郷新潟の「豊穰の海」にアングルを当て、その魅力をさまざまな面から謳い上げて、さながら叙事詩のような作品だ。青光りする鯛の網や、お櫃も積み込んで鱈漁に向かう父子の姿は、実見した者にしか解らない光景だ。村上の軒下に吊るした塩引き鮭は冬の風物詩。新年の膳に並ぶ海の幸は寒ブリ、南蛮海老、生牡蠣、鱈の沖汁……。

○その他の作品

陽炎を見つつ女の嘘をきく

寒鴉六方踏んでる渚

折鶴に想ひをたたむ春の宵

惜しくも受賞に至らなかったものの、応募作品の中には掲句の如く多くの秀句が散見され、来期への期待が高まった。

新 曆文

綿貫ひさの

神田 治江

前進 星野 和葉

世の中、大変な事になっているが、今年も応募して下さった方々に感謝申し上げます。見事、受賞なさった三氏に心より祝福の言葉を送りたい。おめでとう！

「小江戸冬景」

日高 徹

小江戸で知られる川越に、何度か足を運ばれたのだろう。

寒晴や小江戸で拝む富士真白

先ず、一句目で真白な富士を拝み、さあ、これから小江戸に挑むぞという心意気が伺える。

裏窓に聖樹と少女蔵の街

淑氣満つ午前零時の時の鐘

福詣御朱印帳に令和の字

松過や姫の唄ふ「通りやんせ」

蔵の町、時の鐘、通りやんせのお宮と、川越の勘所をおさえ、楽しみながら詠まれている。

春を待つ一番街にK O E D O の香

観光客には、外国人も多いので横文字の看板かとも思ったが「香」が分かりにくい。一番街には蔵通りとは違った店が並び、その辺の雰囲気かとも思う。古きを守り、新しき未来への「香」であろうか。

「生命讃歌」

染谷 正信

正信氏のことは、あまり存じ上げていないが、中々の勉強

家だとお聞きしている。どの様な勉強法か聞いてみたい。

春めくや利根の堤を一万歩

青空の如き未来を鯉轡

農捨てし長子に届く今年米

地球儀をリボンで結び降誕祭

早暁の叱咤の怒号寒稽古

日常の生活を切り取り、赤子からご自身までの正に生命讃歌だ。地球儀にリボン結び世界の平和を願ったか。少し、まともりに欠けた様に思ったが、タイトルを掲げての十五句に努力のあとを認めたい。

「海は産む」

梅澤 輝翠

輝翠さんは、新潟出身とお聞きした。さすが「海は産む」で十五句揃えた力量には成程と納得した。

お櫃も積んで漁師の父子鱈漁

いかづちの光砕けて佐渡島

烏賊釣りの光の海へ流れ星

巫女が舞ふ夕日の浜の秋祭

新年の膳に賑はふ海の幸

地元を知らない者でも情景が浮かび楽しませて頂いた。

初天神絵馬の駆け出す風の来て

陽炎を見つつ女の嘘をさく

帯を解く音のかそけし春の闇

惜しくも賞を逃したが、筆者の心に止まった句。

田中 章嘉

新 曆文

神田 治江

推薦委員寸評より

「小江戸冬景」

○一句一句に今まだ残る江戸の雰囲気と薫りが感じられた。

○句柄端正、句意明快、欲を言えば一年を詠んでほしい。

初明り力漲る鬼瓦

寒の入父似の羅漢見つけたり

左義長の人は紅山は闇

○小江戸川越だけで十五句を詠み切ったのには感心した。川

越の町をブラリ散歩したい気持になる。城下町をKOEED

○と詠む勇氣、見事です。

○冬景が上手く描写されている。

裏窓に聖樹と少女蔵の街

つはものの生死を分けし白襖

○小江戸の情景描写がすばらしい。

左義長の人は紅山は闇

左義長の景を紅と黒でズバリと表現した作品に魅かれた。

が見える。

種袋振つて命の音をきく

農捨てし長子に届く今年米

地球儀をリボンで結び降誕祭

○一句一句が生活に根ざし銜いなく日常の有様、生活が伝わる。晩学のアテネ・フランセの句には思わず共感。

「海は産む」

○海を主題のそれぞれの句に海、風、塩の香りまで感じた。

○句のリズムがよいので快いですね。次々とひろがる海にま

つわる世界が展開する。

灰色の空にとけこむ冬海

此の作品に作者の感性のよさを感じました。

「生命讃歌」

○人間模様を多面的にとらえ面白い。健康で意気満々の日常

新珠賞応募作品秀句選

網野 月を

今年度の新珠賞受賞は逃しましたが、それぞれに応募作品の十五句の中には秀句が多々あります。その内、幾つかをご紹介しますと思います。

曲がり屋の茶室の箆器梅擬
梅擬鳥の影落つ紙干場

藤間 友二

全十五句を「梅擬」で揃えたのは圧巻です。前句は「箆器に「梅擬」を活かしているので御薄でありますか? 「曲がり屋」を含めて三つの物象の関係性が巧く図られています。後句は全応募作品の中でも秀抜句でありましょう。この鳥は飛んでいると思います。とすれば一瞬のことであり、俳句はその一瞬を叙すのに最適の文学です。一句に一瞬を入込むことが出来るように句が引き締まります。

汐入りの池に白銀鯉光る

田中 章嘉

比叡山お色直しも雪化粧

多角的に対象を見据えて丁寧にならすのがこの方の句作りです。「汐入り」と座五の季語の「鯉」の組合せが生活感のある実景に収まっています。夕景であるかと筆者は思います。後句は少々おどけた感のある句意になっています。京都の鴨川辺りから望んだ比叡山でありましょうか? それとも琵琶湖畔か

らの景でしょうか。中七に「お色直し」とありますから琵琶湖畔から眺めた朝の景色かも知れません。

新 暦文

益栽を僅かにずらし日脚伸ぶ

作者はロマンチストです。真中を少しばかり窪ませて掌の中央に貝殻を置けば必然的に「運命線の上に」落ち着きます。それを「置き」と作者の行動に拠って恰もそう言ったと言っているのです。上五の季語「くら貝」の有するイメージを遺憾なく活かしています。後句はより日当りの好い所へ益鉢を移動させたと言うことでしょう。両二句とも作者自身が句の中にいます。テクニクを感じます。他に「陽炎を見つつ女の嘘をさく」があります。

反町 修

春めくや見沼田圃に農の影
でで虫やローン背負へるサラリーマン

前句はしっかりとした構成を有しています。春耕の景を上五の季語「春めく」で担保しながら、座五の「農の影」でその景を決している。中七の「見沼田圃」で空間を照準しています。条件と主題の配置が絶妙です。後句は新味溢れています。一読、社会批判的なカリカチュアのような印象を受けますが、一方で上五の季語「でで虫」のイメージを現代的なアイテムを散りばめて展開しているようにも読めます。深読みの出来る句に仕上がっています。

佐藤 克之

つかの間の帰省子母の肩たたき
老老の介護ひたむき花木権

前句はパーソナルな内容ながら、作者の客観的な視線から捉えられています。所謂「母」句はこのくらいの距離感が必要でしょう。「帰省子」との関連性において「母」なのであって、作者の母親ではないのです。仮に実の母親であったとしても掲句での位置関係は他者から見た母子を捉えています。後句も同様です。「老老」の二者の表現が突き放されているからこそ「ひたむき」がベタベタした感性に至らないで、踏みとどまっています。

よしよしと母に誉めらる春の夢

杉浦 理恵

この作者は興味深いです。オノマトメもさることながら、あらゆるところでの比喩に作者独特の感性が滲みだしています。このアイデンティティを大切にして頂きたいです。前句は下五の季語「春の夢」に収斂されます。心温まる素晴らしい夢ということであり、つまりは季語の働きを十分に効かせています。後句は「常念岳の薄紅葉」を「ひかりの澱」と見立てているだけなのです。しかしながら上五の「ひかりの澱」の比喩にはオリジナリティ満載でありましょう。

昨夜の雨沼を湛へて猫柳

宮崎チアキ

波音が癒す踏絵のマリアかな

前句は作爲の全く感じられない句です。座五の季語の「猫柳」についてもです。実景だからこそその力強さが感じられます。今現在を見つけている視線の確かさも感じます。掲句のような句は何かを訴えているではありません。此方から歩

み寄って何を言おうとしているのか教えを乞う句なのです。後句は意味深い句です。江戸時代の宗門改を詠みながら実は現代人の敬虔さへの問いかけをしているようです。他に「刈り込まれほどよき枝葉梅雨に入る」があります。

知恵の輪の抜けそで抜けぬ春隣

綿貫ひさの

水を吐く石垣の穴梅二月

前句は中七の「……そで」の叙述が巧妙です。「抜けそでで抜けぬ知恵の輪……」とやっても良いところです。が「……そで」ではなくて「……そで」としました。この舌足らずなりズム感が、知恵の輪にぴったりです。後句の中七「……穴」はストイックに切り詰めた言い方です。座五の季語「梅二月」で若干緩和されてはいますが、筆者としては思い切りの良い言い方に思えます。控えめな叙法が作者の持ち味でありますが、欲張った句も読ませて頂きたいものです。

折鶴に想ひをたたむ春の宵

神田 治江

雲水の草鞋の先に村時雨

「想ひ」を畳まれた方はどなたなのでしょう？ 気になりますねえ。無論、折り鶴ですから、臥せっておられる方かも知れません。ご快癒を祈念いたします。中七の「想ひをたたむ」という丁寧な表現が上五の「折鶴」と重ねられて効果的です。後句は王道の作法です。「雲水」が少々古めかしい感じのように筆者には思われますが、実景なのであります。中七の「草鞋の先に」の焦点の合わせ方が、俳句的であり、将に一句を叙景の俳句にしています。

鼓

笛

集

山中 順子 選



ほろ苦し退職の日の露の臺
春服とどこかちぐはぐ黒の靴
王将の駒の根付や桜咲く

新井 孝麿

雲雀見むと掴まり立ちの窓は空
古雛老人ホーム明るうす
豆ならぬボー口施設の鬼やらひ

山岸 弘子

山吹や山路黄に染め暮れ残る
初蝶や付箋の如き象の背
八つ橋を吹かれて越えし春の蝶

大塚 茂子

鬼おろしもて初午の母の味
届かずや水面を蔽ふ猫柳
民権の同志も眠る春の土

阿部 幸代

ポケットのコーヒー温き冬の薔薇
臥竜梅友は元氣をとりもどす
梅一輪二輪と開くガラス越し
水仙花息急き荒く登る土手
ぼつねんとゐる土手の少年水仙花
未だ咲かぬ梅の林に小綬鶏

水落 守伊

細井 良子

鼓笛集巻頭（四月号）

私の好きな一句（自句自解）

青木 鶴城

春めくや平安絵巻の宇宙感

麗かな春の日に、平安絵巻の男と女の雅を鑑賞する。
残念ながら、もう光源氏の精力は持ち合わせないが、
俯瞰の構図に覚える時間・空間を超えるロマンは、ま
さに宇宙なのである。

鼓笛集作品評

山中 順子

ほろ苦し退職の日の落の臺

新井 孝磨

永年勤め上げたその日の膳に春の味が載せられていた。日頃の家族の様子やら、特に奥様の細かい心づかいが見えてくる。落の臺の句は沢山詠まれるが、この句のさらりと自分の人生に加えられる句に好感が増す。

豆ならぬボーロ施設の鬼やらひ

山岸 弘子

節分の豆まきが、卵ボーロであるとは何ともくすぐられる。老人ホームに入院なされている様なので尚更のこと赤ちゃんの時のなつかしいボーロが早春の光の中で転っている和らかさがこのホームの幸が静かに伝わってくる。老は誰にでもくる。

嬉しいことがありました

第21回「金子兜太記念 秩父鉄道の俳句」に、「臯月の会」の秋本カズ子さんが応募し、見事に特選を獲得しましたのでご披露します。

特選句

山峡の陽ざしの底に帰り花
秋本カズ子

秋本カズ子さんは秩父の出身で、「秩父のカズ子」と言われるほど秩父の自然や風物・土地柄に精通し、句会に秩父を題材にした作品を出して仲間を唸らせています。今回の応募で、日頃の実力を遺憾無く發揮してくれました。ちなみに、選者は、内野修氏「海原」同人・埼玉新聞「埼玉俳壇」選者・現代俳句協会会員。応募者・一三六名、応募句数・六五四句。選は、特選三句・入選一〇句・佳作三〇句。

◆この企画は、「秩父鉄道整備促進協議会」の主催によるもので、毎年秋に募集が行われ、秩父鉄道の各駅に応募用紙が用意されます。

水明俳句会の皆さん、ぜひ挑戦してみてください。

(山本鬼之介・記)

山本鬼之介 選



初暦めくれば未来動き出す
立春の柱時計にリズムあり
白梅や母の形見の五つ紋
古木にも古木の力梅咲けり
薄氷に朝の光の乱反射

熊谷越田 栄子

母の背より値札がのぞく余寒かな
下萌を探る小犬の鼻に土
下萌に目覚め地球の武者振ひ
日めくりは三段跳の二月尻
三椏の花分かれし先に多幸あり

さいたま 渋谷きいち

モディリアーニの細長き首春めきて
下萌や我に囁く応援歌
灯台に細波の立つ花菜風
切り岸に波の跡ある余寒かな
地震過ぎて額縁正す余寒かな

川口野田 静香

冬の海金の水脈ひく入り日かな
つかのまの日溜りの宴寒雀
愛想よき鬼の背めがけ豆を打つ
春浅し泥を撫でをる鯉の腹
裸婦像に兆す胎動春うらら

さいたま 曲淵 徹雄

草萌や靴新調の登山道
下萌や退院を待つ車椅子
鶯や運び留むる筆の先
早春の香り纏ひて男坂
春光や土壁の白なほ白く

青木 鶴城

隣席はかつてマドンナ年忘
鯛起し軍艦島を照射せり
お年玉打ち出の小槌欲しかりき
冬の灯や人より多き村の家
純情のをとこをみなをペチカかな

保坂 翔太

封切れば墨の匂ひの花便り
春立つや水面に陽の香ちりばめて
初鏡老いは見ぬふり口結ぶ
花開く森の深部に会話生む
薄氷や太陽つつみ蒼みをり

熊谷 神田 治江

七半の渡る街道冬の海
ふらここや古傷疼くクラス会
無住寺の内陣の闇余寒なほ
斜交ひの庭に椿や竹とんぼ
薄氷やダム湖に舫ふ巡視艇

行田 近藤 徹平

今はもう釘つけのみ針供養
傷つくも色を忘れぬ竜の玉
冬萌や胎動知らすメール有り
横丁を傘かしげして春時雨
小社に落ちては消ゆる春の雪

草加 河野はるみ

瓜割の句碑に水音水明忌
白壁に映ゆる紅梅鳥の影
しつぽ上げ夫より先を梅の道
保育器の手足ふはふは梅の朝
兄病みてトラック廃車薄氷

鴻巣 大塚 茂子

オンザロックの音の乾きや遠雪崩
眉のうすきは情のうすさよ春の雪
春雪や夜半に解けゆくわだかまり
宇曾利山三途の川も春の水
水引の金銀緋色水の春

横浜 正木 萬蝶

衿元の触れんばかりに猫柳
退りゆくはかなきものや薄氷
紅梅や幽玄かもす祇王像
傷負ひし恋猫そつと戻りけり
白銀の富士を遠見の余寒かな

さいたま 宮崎チアキ

さららかな幾何学模様薄氷
片恋を春の水に閉ぢ込めて
無造作に臘梅一枝大徳利
名代なる釜めし伴に臘梅郷
ひたひたと寄せくる岸边薄氷

高崎 原田 秀子

薄氷や朝陽を背負ひ登校児
薄氷を解かず日射しが心にも
二月早や森に呼応の鳥の声
二月来て畑のビニール光り出す
梅まつり香りを揺らす太鼓の音

熊倉千重子

寒林や終のすみかに射す入り日
初御空放射能無き明日ならむ
露味噲を小出しにつまみ飲んだくれ
下萌や浅間がそつと顔を出し
猫柳何やら父の気配して

さいたま 日高 徹

母見舞ひ嘘を残して春寒し
春めくや水底に立つ泥煙
下萌や仔牛にいよよ角出でて
朝練の走る一団土手青む
水温む天守呑まんと濠の鯉

上尾 横山 君夫

麦を踏む決めねばならぬ子の進路
廃線の鉄路の鏝や草萌ゆる
振ぢ曲がる老幹の枝梅真白
喜寿なれど五段の剣士梅の花
制服を脱ぎ捨て街へ木の芽時

染谷 正信

吹く風に梅花を散らす里の道
主亡き荒るる梅林開花して
梅咲いて南の窓を開け放つ
初午や王子稲荷の奴風
飛鳥山桜はやつと一分咲き

さいたま 田中 章嘉

新築の隣家の門の団子花
春の霜曙光にそろり溶けにけり
利根川の堤をちこち鼓草
研のこして溪谷下り行く雪解
新社会人波定まらぬ春の駅

加藤でん治

浅き春澄みし音色のグロッケン
快癒せし友より余寒見舞かな
猿回しの猿は「モモちゃん」梅祭
よき程に巡りし処梅見茶屋
春光やたまむし色の鳩の胸

東京 太田 絹映

早春の土手に多勢の豆画伯
背を丸め職を辞す夜の余寒かな
豪邸の長き廊下の余寒かな
朗報に余寒僅かに消ゆる朝
春めくやスポーツジムの募集ピラ

新 曆文

覚めやらぬ草を尻目に露の臺
野に山に春の光が生まれゆく
細波の川面に春の光かな
春光や長話する背の丸み
春の水手より逃げたる束子かな

若狭 飛永 鼓

うなだれる水仙前を向く水仙
海風に笑む幾万の水仙花
豆を打つ鬼に命中せぬやうに
発掘の穴の無数や浅き春
ハモニカを独り吹く人春の川

東京 石川 理恵

初手水まぶしき光手に抱く
風花の舞ふ山頂に雲の影
風がきて臘梅匂ふ峠かな
風花に紅き掌遊びけり
飛行機雲空を分かちて日脚伸ぶ

さいたま 秋本カズ子

淡雪をうつすら乗せて三輪車
皺深きまたぎの示す雪崩あと
縁側に母の友来て春隣
春立つ日富士の白さと空の青
草萌や秘湯の宿へ続く道

石田 慶子

茶摘み待つ畑くまなく光充つ
老梅の山へ健脚競ひ立つ
暮れてなほ立ち去りがたき梅の里
気紛れに回る水子の風車
春愁や再読源氏物語

平塚 丸屋 詠子

大寒の朝の御飯に生卵
ゆりかもめワイングラスに残る紅
葬送の背中与腹の懐炉かな
休日の鶯聞きて二度寝せる
覗き見る大根引きし後の穴

若狭 山崎 郁子

鶯や水の煌めくはけの径
鶯が鶯を呼ぶ農の庭
春シヨールレジを待つ手の新刊書
下萌や絵の具とく水またさして
春浅し弁財天の銅鑼を打つ

さいたま 橋本 京子

寒肥の効かせどころを土に聞く
静寂をそつと持ち上げふきのたう
山畑に土ほろほろと建国日
護摩壇の煙を招く節分会
ホットケーキふんはり溶けて春眠し

伊予 向井 章子

鉢植を残り引越す浅き春
亡き夫の写真の整理鳥雲に
転居せり春一番に背押され
眺め入る紅梅の香は届かねど
盤に挿す光撓めて猫柳

斎藤 みよ

指先の触るる新芽や春の土
新しき手帳に慣れし二月かな
初音聴き目覚めし朝の快き
鶯に返す口笛掠れがち
下萌をころげて犬の白き腹

さいたま 秋山 紅花

公民館の花壇にボール二月尽
貝殻細工の遠き想ひ出春の海
下萌や川辺にそよぐ名無し草
百鳥のオーケストラや二月尽
海苔干すや香りほのかな女人の手

さいたま 塩野 久子

露味噲やかすかに残る浅緑
早春嬉し赤信号を待つときも
うぐひすに始まる垣の立ち話
手摺より身を乗り出して初音かな
積まれたる新刊本に春動く

山口 韶子

泥葱の束を積みたる土間の隅
冴ゆる夜の月と星座に増す光
臘梅や宝登山からの生中継
春を待つ指輪の跡の葉指
日脚伸ぶ母の形見の鯨尺

新井 孝磨

寒明の水路に鯉の口数多
塗り替へし稲荷の鳥居冴返る
猫柳小さき流れに板の橋
猫柳長子を守る父祖の土地
早春の出窓は猫の指定席

笹本 啓子

如月や猫に付けたき万歩計
秋ヶ瀬の野焼水門あふり来る
如月や中の丸見え美容院
陽炎やしやべり通しの歩く会
小学生に席譲らるる春シヨール

田中 泰子

梅が香にはつと振り向く夜道かな
地中の眠り掘り起こされて春の土
水切りに夢中の子らや猫柳
梅が香に目を覚ましたる気張りかな
粗おこし雀来て待つ春の土

西幅 公子

転院も漂泊とせむ春の雲
針鋏ご法度と知る針供養
街道の遅日をいそぐ引越し荷
佗助の終りの一花師に手向け
囀りのゆらす細枝雨呼べり

横浜 山岸 弘子

厄災の傷跡凍りゆく大地
すぐ消ゆる淡雪に笑むもみちの手
フーリングに豆撒く音は機関銃
針供養子らの名札を付けし針
クッキー缶が母の針箱針供養

吉川 杉浦 理恵

鴨十羽集まり春の談議かな
丸薬や飛び出し探す春の朝
踏まれても耐へて芽を出す露の臺
微笑みのひひなの額や整骨院
猫の恋愛の讃歌で呼び寄せる

和歌山 南條さわゑ

大寒や患者溢るるクリニツク
日を浴びて力を貰ふ冬田かな
梅が香や小窓開くればよき寢覚め
氷点下凜と堪へたる寒牡丹
金縷梅の触手を伸ばし日を攫ふ

さいたま 反町 修

落款の散りばむ大地梅一樹
鈍色の空を押し上げ梅真白
暮れ初めて白梅空を飛ぶ構へ
リクエストは祖母のきんとん二月かな
失せし物ひよいと顔出す二月かな

さいたま 松田 朋子

春よ来い母が遊びに来てくれる
早春の思ひ出訪ね隅田川
早春や人影もなき仮設舎に
来光を正面に受け花辛夷
春浅し野菜の並ぶ無人店

山戸 美子

てのひらに香り零るる露の臺
ほろ苦き母の一言露の臺
如月の雑木林に笛の音
如月や裾ゆつたりと富士の山
露味噲や酌み交はす夜の手を添へて

福田 育子

まんさくや満願の帳拝見す
安産のお礼を梅の宮居かな
油揚げの嵩の大仰一の午
定食のご飯大盛り入試終ふ
男子校ざわざわバレンタインの日

下川 光子

夕暮に光残して猫柳
花曇り池の魚影の速きこと
温もりを包みてたたむ春日傘
草の芽の中にひっそり辻地蔵
大空に舞ふや学帽風光る

川村 治

窓口に歳を問ふひと余寒かな
名を呼ばれ小声で返す余寒かな
オフシーズンに庭に凜凜しき水仙花
パンジーが笑みをこぼして咲き揃ふ
初場所の小兵力士に夢託す

杉戸 佐々木史女

就職の孫から初のお年玉
けふの糧足りたる顔の寒雀
春寒や議事堂裏の下り坂
風花を帽子で受けし児の笑顔
風花や美しきもの消え易く

栃木 佐々木典子

猫柳生けて微風が鼻先を
不揃ひの園児の背丈春早し
去勢され平たき顔の春の猫
雪解川城下の町の平家谷
リラ冷えの日暮の道を足早に

さいたま 梅澤 輝翠

能面の角を般若と冬の京
早春や病窓からの空無限
知らぬこと恥づること多々冬の吟行
早春や保育園児の乳離れ
隣組五軒となりぬ猫柳

さいたま 竹澤 和子

博多港暮れゆく波の余寒かな
下萌の地球つらぬくハイウェイ
渡月橋余寒いだきて屋形船
ウイルスや下萌武漢舐めつくす
余寒抱く富士が機上の華となる

藤岡真知子

扁爪の先にきらりと如月来
きさらぎや三三五五の供養事
母何時も白割煮着ふきのたう
路の臺一途に生きた母の香よ
あれ初音誰れの便りかお別れか

高橋 敏子

寒明を待ち侘ぶ赤い三輪車
洗ひ上ぐ布巾の白さ寒明くる
ゴム印の弾力わづか寒明くる
七宝焼のピアス瑠璃色冬董
冬董女ふたりを屈ませて

森 和子

元旦やいつも通りの六時起き
初日記自己満足の句を一つ
新年会あつといふ間に夜七時
再会に眼も口も笑み冬日和
夕陽浴び吾を留むる寒椿

水野 興二

本當の事は云はずに春炬燵

路の臺空家の庭を占領す

誰も居らぬ一人のファッション初鏡

どうやつて食べるいち足す年の豆

冬晴れや意地が邪魔する針仕事

里山にかつての春の鼓動あり

下萌の割れ目哀れや犬走り

戸惑ふや集団風邪の対処かな

煌めく目何故か今年の雛の顔

頬張れば祖母の思ひ出蓬餅

風やはし日差し明かるし春立ちて

草青む赤城山まで取り込みて

飛鳥山裏階段にある余寒

月光を浴び蹲踞の薄氷

母が子と思ふ軒端の鶯よ

母の忌を修すはらから梅日和

忌を修す梅満開の寺の庭

紅梅を褒めて談笑垣根越し

玄関に盆梅飾り人招く

盆梅の香りひろごる茶会席

横 浜 川 島 典 虎

若 狭 岡 本 祥 子

東 京 鈴 木 和 子

蕨 細 井 良 子

蓮池の残兵どもに春の雨

貝売りのこぼしてゆきし春の水

春水を湾に押し出し馬入川

余寒なほピアノの眠る奥の部屋

研ぎ上げし刃の匂ふ余寒かな

梅早し匂ひ動いてゐる日和

左見右見して感嘆や梅一輪

捻挫して気の屈折や日脚伸ぶ

古の見識高き如月忌

一步出て一衣恋しや春始め

早春や枯山水に水の音

早春の今を生きるや吾が命

早春の川の流れに淀みなし

振り向けば六甲山の匂鳥

学帽の白線今も新学期

早春の朝日を浴びて列車待つ

合格の知らせ舞ひ込む春の朝

猫柳ひとりの旅の先に

旅先にお産の知らせ春の夜

早春の海おだやかに空青し

町 田 瀬 戸 雄 二 郎

さいたま 伊 藤 愛 子

千 坂 平 通

野 村 美 子

紅梅や角まで手を振る母は居ず
梅林の紅さし初めし天満宮
立春や朝の神社に鳩集ふ
春浅し古民家カフエで一休み
まだ慣れぬ制服姿春浅し

草加 外村 紀子

手土産は若狭の風と干鰯
思ひきりドライなジンを猫の恋
春の土子牛は尻尾振りにけり
マネキンの指の向かうにある余寒
荷づくりを終へしアパルト春の星

若狭 檜鼻ことは

平凡に生きて七十路豆を撒く
春の川水面やさしく光りけり
梅の木の高きに鳥の遊びをり
恋の猫昨夜の傷を舐めてをり
長椅子に素知らぬふりの恋の猫

さいたま 高原 和子

留守番は自分の世界春炬燵
六軒もホース盗らるる寒厄日
補聴器にとびこむ笹鳴土手の藪
血圧は落ち着き見せる春隣
「初物」と子の掌に二つ露の臺

藤沢 小島喜代子

無理心中を乞はれてみたき雪女
斜にかまへおいでおいでと雪女
余寒なほ玄関ドアの軋む音
マドンナのマスクの艶気春の風邪
春の宵ペテルギウスの受難かな

飯田 忠男

木蓮の芽吹き綿毛を光らせて
姦しく鳥語とび交ふ紅椿
匂集膝に乙女椿の真つ盛り
素描する白玉椿に余情あり
忌日来て土押し上ぐる霜柱

さいたま 櫻井よし江

冬の夜や若狭に古仏立ちつくす
日の神も寝転べ萌えの若草山
うぐひすの嘆きぞ知らぬ浜小町
微睡を起してうぐひす日の新た
猫柳風がじやれつく先斗町

小浜 松島 寛久

陋屋と云へど万朶の梅囲む
朝夕に蕾数へてシクラメン
診察の予約厳守や冴返る
回覧板至急とて踏む春の霜
春めくや赤い服着て髭つ面

いすみ 平石 睦子

川走り子供ら走り猫柳

宮代 関谷多美子

鶯や姿見せずに花散らす

さいたま 小川 洋子

命てふ喜び溢れ春の土

知恵は早ばば上回る入学児

雪柳夫れ夫れの道開かれき

ファッションの流行に似たる猫柳

色とりどりの小花目覚むる春の土

早春や住所変りて文戻る

浅春や元気に団地高齢化

冴返るうすきグラスと指先と

東京 畑宮 栄子

松の孤外してしつとり二月かな

東京 河原 叔子

底雪崩地球の叫び聞くやうな

梅ほつほつ午後から久しぶりの雨

ふと止まるT字路の脇沈丁花

一本の水仙を挿し茶室かな

風和ぐ古木の梅に気淑き香を

外廁への灯り揺らぎて雪女郎

川崎 鈴木 玲子

先ざきのことより今と春一日

春暖炉秘密基地めく地下のカフェ

日替りに惑ふ日和や春寒し

春の川鷺飛び立ちてゆるき風

便箋の文字のかすれも春の風邪

越谷 阿部 幸代

寒雀陸まじく穂を揺らし合ふ

プリン乞ふ妻のわがまま春の風邪

風花や百年の森包み込む

春日部 諏訪サヨ子

しやきつと着る裾が斜めの春モード

楸邸の瞑想の土手草萌ゆる

鋤き込みし春の土の香命の香

春寒し大道芸に客疎ら

初桜観音様に紅をさす

さいたま 小駒さち子

春寒しスーツの並ぶ終電車

戸から戸へ家の歴史の雛めぐり

春寒や未だ色なき裏の畑

さいたま 安倍 弘夫

風信子水を命と花開く

藪跡に寄り添ふ二羽の寒雀

クレーンの音より強く冬鷗

下萌やボール弾みて足元に

ひたすらに歩み風花舞ふ街道
古代窯並ぶ唐津や下萌ゆる
春寒や立読みの本つひに買ふ
下萌ゆる上野の森の子規球場

春日部 仲田 利子

蠟梅も乗せてシルバーカーの母
立春や嫁より先に新居へと
春めくや小さき祠に足止めて
春立つや同郷と知る馴染み客

東京 飯室 夏江

踏みしむる足裏くすぐる春の土
猫柳明日は旅立つ少年よ
ハイヒールこつこつ鳴らし春連れて
待ちわびし梅一輪に憂ひなし

さいたま 菅原 真理

曲の間のホールに響く咳一つ
春近し目となる犬とバスに乗る
甲羅干す亀が居並ぶ春の土手
葉の影にすみれの蕾寄り添ひぬ

さいたま 湯浅 和

恋猫の疑ひ深き後ずさり
高々とたいまつ掲げ野火を追ふ
なりふりも美食もなかり恋の猫
三婆の蘊蓄三様梅見茶屋

山下ユリ子

春時雨大川端は墨流し
春時雨茶店軒端で時すごす
春時雨傘の重なる団子坂
猫柳川辺に添うた散歩道

白田 みち

独りごつ今年も残る鬼の豆
水仙の花活けられてなほ気取り
マヌカンのまとふ花柄春待てり
路地に咲く水仙の背しやんと伸ぶ

東京 柳父 はる

夕焼にパンバスタグラス揺れてをり
母の日の真白き花を選びけり
鈴蘭の音を濡らして山の雨
香水や魅惑のドレス透きとほる

所 沢 関根 千恵

のんべゑの夫の好物路のたう
祖母の忌や花芽色づき君子蘭
ささらぎの風吹く朝の通学路
水仙のほのかに匂ふ仏間かな

鬼 石 加藤ナヲ子

ふと思ふ母の撫で肩枝垂梅
ほめ上手の恩師の背や梅ふふむ
初産の姪に鯉濃春淡し
マスクして目と目の会話散歩道

和歌山 嶋田 洋子

かぶりつくハンバーガーに春さざす
先ぶれか山動くかに底雪崩
コロッケを食べながらゆく二月かな
街路樹の小さくなりて余寒なほ

川崎 板子由美子

散髪を一日延ばし寒明くる
冬童学童の列小走りに

さいたま 長井喜代子

背伸びして硝子まど拭く寒の明け
寒明けや海に繰り出す太公望

よちよちと歩き初めや春の土
陽光のきらめく岸辺猫柳

森下美智枝

春の土蹴つて球児はボール追ふ
初場所や音楽隊と君が代を

靴音や真つ暗闇に冴返る
手の掌に鮮やか赤の寒椿

武田 重子

あかぎれに絆創膏や手内職
大氷柱透けて見ゆるは宿灯

幕尻の賜杯手に沸く明けの春
城下町格子戸越しの雛巡り

岡田 宣子

長閑さやバッハのフーガ友と聴く
沿線の菜の花揺らす黄の電車

春の風邪ひいて気兼ねの講習会
坂多き町にくらすや雪催ひ
春めくや新たな散歩コースかな
植ゑ替へるべきバラの鉢日脚伸ぶ

鬼石 榊原 聰子

片栗の花のにぎはひ風しづか
藪椿竹筒にあり京の庵
縁側の座布団ぬくしすみれ咲く
梅の香を亡き母にもと手折る朝

さいたま 木村るみ子

梅は散り煙草のけむりすれ違ふ
肉球のスタンプ列なる雪明り
梅の花舞ふにふさはし風の来て
コロッケに梅の香漂ふ裏小路

大坂 飯塚智恵子

豆撒くや子等と一緒に燥ぐ犬
掃除機に暴るる音や年の豆
葉の中に折れて埋るる水仙花
棒を立て葉つばで括る水仙花

東京 水落 守伊

チャーター機で次々帰国金鳳華
黄水仙陰陽わかつ二週間
「がんばれ」と集ふ砂浜春の月
第一便やつと家路に黄水仙

和歌山 高橋満耶子

立春の雨戸全開風青し

さいたま 緒方みき子

臘梅や鉛細工かと母の言ふ
立春や土けちらかせ犬はづむ

帳面に施す和綴ぢち如月忌

大阪 遠藤 人美

声色は桃色バレンタインの日
春愁ふ路に瘤なす根の壮気

ひと筆に眠けを誘ふ寒の明け
土手飾る紫一面冬すみれ

さいたま 落合 和枝

ひとひらがグラスに透くる冬葦

初日の出赤にすつぼり槍ヶ岳

佐藤 克之

歌留多会読む一瞬の殺気かな
初彼岸母の御霊に語りかけ

地下道に革靴の音冴返る

鈴木 藻好

潜り行く有刺鉄線猫の恋
花便り一月早い旅仕度

北国や森羅万象冬景色

小川 藤間 友二

春時雨標を辿る母の許
爺惚け抱腹絶倒福笑ひ

寒明や歩巾にもかすかな兆しあり
冬葦の妖艶な色ふりむかせ

さいたま 田中 タイ

季音欄の書き方

○二百字詰原稿用紙使用

○季音（雪・月・花）：欄外右上に朱書

○題名、名前は二行目に

○俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。

※新・季音（花）欄の方は、七月号から花欄になります。

編集部

誌代、同人費、

季音同人費、納入のお願い

本号に郵便振替用紙を同封致しますので、

ご利用下さい。

尚、誌代は前納が原則です。

半年分又は一年分でお願いたします。

水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題

「春の風」(はるのかぜ)

「蜂」(はち)

「遊」詠込み

(注1) 例句 たんぼぼに影の無き子と遊ぶかな

耳搔きが耳で遊べり花雲

春日 烏宇
小田島亮悦

(注2) ○野遊び・山遊び、船遊び、等季語は不可。

句数

通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円。

締切

五月三十日(発行所必着)

※投句用紙使用のこと。コピーも可。

作品評

山本 鬼之介

初曆めくれば未来動き出す

越田 栄子

除夜の鐘を聴きながら、新たな年のカレンダーの表紙をめくり、新年を迎えた実感を得る。過ぎ去った一年を振り返り、これからの一年に思いを馳せる作者の純で素直な気持が、読み手の胸に届く。カレンダーをめくった時に得た躍動感を詠んだ俳句であり、新春俳句大会で高点を獲得、筆者も天賞に推した傑作である。

この俳句大会の後、新型コロナウイルスの蔓延が日に日に深刻度を増し、世界レベルの問題として世の中が騒然となっているが、人間の知恵と努力が魔物を退治し、掲句のような明るい未来が復活することを信じている。

母の背より値札がのぞく余寒かな

渋谷きいち

作者のご母堂はかなりの高齢であるが、健啖で健康を保っておられる由、まことに結構なことである。そのような母上の着衣から、ちらりと値札がのぞいていたという微笑ましい

情景を詠んでいる。気付いた家族が外してあげたのか、悪戯心をはたらいで、本人が気付くまでそのままにしておいたのかは不明であるが、余寒という春先の季節感を上手く生かした温かみある俳句である。

下萌や我に囁く応援歌

野田 静香

家庭菜園や家庭園芸の作業を通じて、地の鼓動や草花の生命力を敏感に感じる機会が多いと思うが、俳人の場合はその思いがより深いと思う。それは、春の季節がもたらす自然界の躍動を「下萌」という端的な言葉を通じて敏感に把握できるからである。

早春の土に触れ、芽を伸ばし始めた草や、蕾を膨らませた花に近々と接して、その感動を「応援歌」と表したことに喝采を贈る。

裸婦像に兆す胎動春うらら

曲淵 徹雄

公園または美術館に置かれている裸婦像だと思うが、その像に胎動を感じているのであるから、全身に血が通っているような見事な裸婦像だと思う。胎児の存在を実感させる胎動までも想像するのは、単に像の出来映えだけではなく、もの動きが活発になる春という季節感にも起因するものだと思う。まことに感性豊かな作品である。

驚や運び留むる筆の先 青木 鶴城

整頓された座敷で、半切に筆を運ばせている情景を想像する。折から飛来した鶯の美声に筆を留めて聴き入っているという、雅趣に富んだ俳句である。さて、留めていた筆が再び動き始めて、書かれてゆく文字に微妙な変化が生まれるような気もする。静の中に動があり、動の中に静がある。

冬の灯や人より多き村の家 保坂 翔太

読み重ねるにしたがって、尋常ならざる村の様子が伝わってくる。自然災害による住民の離村や、若者や壮年者の都市部への流出などが原因して、村に居るのは年寄ばかり。年を追う毎に人の住まなくなった家が増えてゆく。限界集落と言われている村の様相なのか。一村の中に、人の住んでいる家に、ぼつりぼつりと灯が点っている。本来、冬の灯のイメージは、人の心に暖かみを与えるものだが、この灯火は、この村の厳しい現実を語る明かりなのである。

封切れば墨の匂ひの花便り 神田 治江

北国の人の元へ送られてきた筆書きの花便りであろうか。幅広の罫の和紙の便箋に書かれた流暢な文面に、手紙を読む当人も、咲き競う桜花を愛でつつ逍遙している気分になる。

心に沁みる墨と和紙の香りに加えて、仄かな桜の香りも漂ってくる気がする。スマホ万能の現代には、実に貴重な手作りの花便りである。

横町を傘かしげして春時雨 河野はるみ

江戸時代に、世界で一番人口の多かった都市は江戸だったそう、人の多い江戸の中で、皆が気持よく暮らすための知恵として「江戸しぐさ」が生まれ、口伝で受け継がれてきた現代ではあまり見掛けない仕草であるが、「傘かしげ」を筆頭に、「肩引き・七三の道・こぶし膝浮かせ・横切りしぐさ」など、その内容を知るとなるほどと感心する。雨の日に、狭い道ですれ違う際、お互いに傘を外側に向けて相手が濡れないようにするのが「傘かしげ」である。筆者も、必要に応じてこの所作をすることがあるが、相手はお構いなしに通り過ぎる。「横町」と「春時雨」が、江戸情緒を再現している。

オンザロックの音の乾きや遠雪崩 正木 萬蝶

有名なスキー場にある高級ホテルのバー。止り木の婦人に、洪みのあるパーティーが、客のオーダーしたウイスキーをオンザロックにして差し出す。慣れた手つきでグラスを傾ける女性客。固い氷がグラスに当たり、乾いた音を発する静かな店内に、何かの音が伝わってくる。『遠くの間で雪崩が起

きていますのです」と言うバーテンダーの説明に頷き、二杯目をオーダーする女。さて何者なるや。

片恋を春の氷に閉ぢ込めて 原田 秀子

早春の旅のひと日。朝の散歩で沼の畔に佇む女。岸边には薄氷が張っている。ある男に叶わぬ恋心を抱いた過去の日々を思い出している。あの時、思い切つて告白していればという後悔が胸を過ぎる。まだまだ話のつづきが聴きたくなる物語性の濃い俳句である。

斜交ひの庭に椿や竹とんぼ 近藤 徹平

先ず「斜交ひの庭」という言葉を解きほぐさないと、句意と一句が醸し出す情趣を理解することができない。筆者なりの解釈では、庭と庭が接している隣家ではあるが、まともに接している訳ではない。即ち、庭と庭が、ある部分で接しているということ、それを端的に表したのが「斜交ひの庭」である。更に解説を進めると、暇つぶしに作った竹とんぼを飛ばしていたら、折からの風に乗って斜向かいの家の庭に落ちてしまった。表に回つてその家を訪ね、庭に通してもらつて竹とんぼを回収したが、その庭に見事な椿が咲いていた。ということであろうか。「斜交ひの庭」の大道具と、「竹とんぼ」の小道具とを上手く使いこなしたのが成功の鍵である。

白壁に映ゆる紅梅鳥の影 大塚 茂子

旧家の土蔵の白壁であろう。白漆喰で上塗りした壁は実に美しく、近景でも遠景でも人の目を和ませる。掲句は、白壁を日本画の画紙に見立て、今を盛りの紅梅を画材として配している。その絵に躍動感を与えるのが「鳥の影」である。作者が、絵師の眼で練り上げた一句である。

紅梅や幽玄かもす祇王像 宮崎チアキ

平家物語の中の一女性で、平清盛の寵を受け、故あつて若くして尼となり、往生院（後の祇王寺）に隠棲したと伝えられている「祇王」である。この句の祇王像は、今の祇王寺に伝わる木造仏であろうか。波乱に満ちた祇王の人生に、境内に咲く紅梅を重ね合わせると、この俳句に一層の趣を感じる。筆者の父が、昭和二十三年二月八日、祇王寺の境内で写生をしていたら、『お寒いから中にお入りください』と、庵主の智照尼に招かれ、草庵の囲炉裏にあたりながら、俳句話に興じた、という逸話がある。「奥嵯峨にすみて一人や春の月」という智照尼自筆の句と落款、そして、「往生院 祇王寺」の落款が、父の墨絵の写生帳に記されている。余談失礼。

薄氷を解かず陽射しが心にも 熊倉千重子

庭内の池や茶庭の手水鉢など、身近な処に張る薄氷には、ことのほか愛着が生まれるのではないかと思う。寒さが骨身に沁みる朝、うっすらと張っている氷が、陽の高くなるにつれて溶けてゆく。そんなにも強い陽射しではないのに。薄氷を溶かす力は、エネルギーの強さではなく、お日様の慈しみの心ではないかと思えるような、柔らかな春の陽射しである。

寒林や終のすみかに射す入り日 日高 徹

作者の転居先が調神社に近い処と聞いていたので、句を一読して寒林のイメージが伝わってきた。「終のすみか」と言われると、少々大仰なと感じないでもないが、元々ご両親が住んでおられた実家と聞いていたので、なるほどと納得した。季節によって入り日の差し込む角度や長さは変わるものの、差し込む場所には大差がない。この入り日の家と生涯を共にするのか、という感慨が籠められた俳句と受け取った。

廃線の鉄道の錆や草萌ゆる 染谷 正信

かつて利用客の多かったローカル鉄道や路線バスが、自家用車に取って代わられ、廃線や路線廃止につながっている。しかし、自然の力は偉大で、列車の音が絶え、光っていた線路が錆び付いた今もなお、季節が来れば普通通りに草が芽を出し、野花が咲く。客をいっぱい乗せた幻の列車がやってくる。

筈のこして溪谷下り行く雪解 加藤でん治

連山に降り積もった雪が、春の訪れと共に一気に溶け出して溪谷に流れ来む。清らかな音を響かせていた溪谷が、荒々しく変身し、轟音を発して雪解水を押し流して行く。消えゆく雪が、名残を惜しんで発する筈なのか。

早春の土手に多勢の豆画伯 新 暦文

露の臺や土筆が顔を出し、蒲公英が咲き乱れる小川の土手。小学生の一団が、先生に引率されてやってきた。皆一様に大きな画板に画用紙を広げ、真剣な目差で絵筆を使っている。昔を思い出し、少し離れた場所からその光景を観察している作者。この子供たちの中から、将来名を成す画家が生まれるかとも思いつつ、心の和む時が過ぎてゆく。

草の芽の中にひっそり辻地藏 川村 治

「辻地藏」を直訳すれば、「路傍にある地藏尊」の意であるが、街道や市街地の片隅に然り気無く立っている古びた石の地藏さんを目にするところがある。江戸時代には旅人が行き倒れて、中には死者も出たので、霊を癒やすために地藏が建てられたという。現代では、交通事故による死者を弔うことが目的で、交通量の多い国道や市道の路辺で見掛ける。

水琴窟

(水明集三月号鑑賞)

池田 雅夫

庭師来て師走の風を置いていく

伊藤 愛子

十月ごろ、庭の松の新葉が生長してから古葉を整理して風通しをよくするのが「松手入」である。また雪囲いなど冬にも庭の手入れをして見映えをよくすることも師走の風物詩となっている。「師走の風を置いてゆく」に庭師の技量をみる。

冬の朝木立きりりと並びをり

白田 みち

冬の朝の寒さに身がひき締まる思いがする。「冬木立」と詠まないで「冬の朝」を詠んだところに注目する。木立の凜凜しさを表現しながら、冬の朝の自身の心情を重ねたところに深みがある。木立の梢の一本一本が手にとるように見える。

決壊の堤に残る冬柳

飯田 忠男

昨年の台風禍、大豪雨による川の堤防の決壊は甚大な被害を及ぼした。その復興に今も手をこまねいている。そんな堤防に力強く残った柳。冬は葉を落とし細い枝を垂らしている。春には芽を吹く生命力を復興の力に重ねた思いがある。

半眼は仏の境地日向ぼこ

水落 守伊

仏様は「無念無想」の境地に達し、その目は半眼であるという。座禪を組む僧もまた、半眼で無我の境地を目指す。煩惱を消し一切のわだかまりを捨て、ただ、ただ安心をいたたく。「日向ぼこ」とは、その境地に最も近い至福なのだ。

熱爛や黒子気になる酌上手

細井 良子

艶めく匂に平静を保てるかどうか心配ではあるが、拝読する。小料理店であろうか。郷土料理の「きりたんぼ」などをいただきながら極上の酒を楽しんでいる。おかみさんの手元か鈴元か定かではないが、「黒子」が妙になまめかしい。

はふはふと舌を転がせ大根焚

高橋満耶子

十二月九、十日の両日、京都鳴瀧の了徳寺の行事である大根焚。親鸞聖人の故事に由来する。「舌を転がせ」の措辞に共感。熱熱の大根を口に含んでいる仕草が見てとれる。「大根」ではなく「舌」を転がすところに俳諧味が生まれる。

独り言増えてひとりの年用意

宮井美恵子

「ひとりの年用意」から、ご主人を亡くされたと推察する。亡くされた直後は喪失感で言葉も出ない。ようやく現実を受け入れられるようになった。気丈な姿がいじらしい。

倒影の湖面あやなす山紅葉

櫻井よし江

「倒影」は逆さに映る影である。真つ赤に染まつた山紅葉それをそのまま映す湖面の鮮やかさを目の当たりにして言葉 を失っている。これに夕陽の赤さが加われれば、一層明るくみ ごとに紅葉となる。筆舌に尽し難い光景をみごとに詠んだ。

初霜を踏み荒らしゆく通学路

中尾 陽子

初霜が降りると、いよいよ冬が来たと実感する。子供らは そんなことにはおかまいなしで、白くなった通学路の霜を躊躇なく踏みつける。それがまた、おもしろくてたまらない。元気な子供たちの逞しさをうまく詠んでいる。

上州の風にゆれるる葱畑

加藤ナヲ子

葱で有名な群馬県下仁田。山から吹き下ろす空つ風でも有名。この風の寒さが葱の甘味をつくる基でもある。野菜は寒さで凍らないように糖度を増して予防するという。空つ風に揺れながら賢く対策を講じている葱の健気さを称えている。

麗かやだれもがいつか風になる

関根 千恵

「千の風になつて」のように魂は、亡くなつてもゆかりの地を離れない。一般的には「草葉の陰」といい、墓の下に眠るのである。穏やかな暮しが「麗かや」に象徴されている。

好日や陽に染まりたるつるし柿

木村るみ子

安心して暮せる平和な日を「好日」という。「つるし柿」の里を「日本の原風景」と称する人も多い。時間に追われることなくゆったりとした日が暮れてゆく。あたりまえに日が昇り、日が沈む。人も吊し柿のように熟成できれば、と。

秋の声つき抜けてくる神の杜

佐藤 克之

実際には「秋の声」を聞いたことがない。が、さまざまな音や鳴き声に秋の気配を感じることがある。青々と茂っていた神社の杜も葉を落とし始め、枝々に隙間がみえる。秋の澄みきった杜の空気に、音も声もはつきりと聞こえる。

隧道を抜けて翠微や道をしへ

藤間 友二

「翠微」の語が目にと留まった。「道をしへ」は斑猫（はんみょう）という昆虫である。光沢のある碧緑に黄、赤、黒などの斑点がある。独特な紋様のある体色と、隧道を抜けて広がる山の翠が対照的に思えた。「道をしへ」の観察が充分。

セロハン紙揉まれ皺くちや風邪の声

遠藤 人美

セロハンを捨てるときは手で揉みくちやにしがちである。一方、風邪引きの声は「がらがら声」などと痛々しい。この取り合わせが絶妙。句のぶつきらばうさも功を奏している。

句集喝采

近藤 徹平

◆岡崎桂子「大和ことば」

朔出版

著者略歴 昭和二十年茨城県生。昭和五十六年「沖」入会。昭和六十一年今瀬剛一主宰「対岸」创刊時に入会。平成五年句集『第一信』、同十四年句集『応援歌』、同二十一年「梓弓」刊。平成十三年評論集「真実感合への軌跡」加藤楸邨序論刊。現在「対岸」編集同人、俳人協会評議員、NHK学園俳句講師。

著者は茨城県で活躍し、句集の帯で今瀬剛一「対岸」主宰が「論の強い作家」と称賛する句歴四十一年の作家である。母郷水戸ぶつきら棒のあたたかし
蓮見舟蓮をへだててすれ違ふ
雲の峰立ちあがりけり破船群

一句、筆者の交友録によれば茨城人気質はまさに温かいぶつきら棒の語が的を射ている。二句、茨城県の蓮根生産量は全国の四割を占める。三句、東日本大震災では東北三県が報道されがちだが、隣接の茨城県でも甚大な被害が発生した。飛花落花大和ことばの飛び散れり
百千鳥神話の島に目覚めけり
翁面雪夜の神となりて舞ふ

窯変は神のほほみ栞榴咲く

著者は「あとがき」で、「俳句は自然と自分と言葉がほどよく関り合って、絶妙なバランスが取れた時完成する」と記すように言葉を大事にする作家である。一句は句集の表題とした列島の信条が伝わる。二句の「神話の島」を筆者は日本列島と受け止めたが如何か。三句・四句も神が身近な句である。

◆知久深雪「芋麻の帯」

東京四季出版

著者略歴 昭和五年福島県生。平成十年俳句を中田水光に師事。平成十七年中田水光主宰「雅楽谷」创刊同人。

著者は、中田水光「雅楽谷」主宰の「序」によれば「俳句を古希より始め、卒寿までの二十年間」の成果を句集に纏めたという遅咲きの大輪である。入会最初の平成十七年の作品から。

菊坂も芋坂も猫一葉忌

うたまろの羽織の裏や初あかね

伊豆の月双陣に入れ持ち帰る

遅咲きでも句は最初からエンジン全開である。「雅楽谷」

会友宮本泰子氏は「跋」で、著者は趣味が広く、着付、書道等は師範を務め、句会には常に着物で出席しているとのこと。

芋麻の帯の余りし桜の夜

花冷えやしのび込みたる身八ツ口

濃く薄く墨の香りや今朝の秋

正客に指名されたる初茶会

一句は表題とした句。芋麻（からむし）は著者の母方出自の奥会津に伝わる織物で、現在は殆ど入手困難とか。二句は着物、三句は書道、四句は茶道。人生を謳歌し輝く卒寿である。

春夕べ一つは夫のわれ待つ灯

隣室は夫の部屋なり春の夜半

「序」によれば著者には技術者として大企業で多くの発明を成し遂げた夫君がいたが、令和元年に九十五歳で旅立たれた。著者は「あとがき」で一度も諍いをしたことがないと記す。

水明例会

第一例会（浦和）

春雷の遠きがままに離郷せり
 活け締め鯛褒めそやす初ひひな
 文机に光る鉛筆春の雷
 万華鏡の華すぐ崩れ春の雷
 走り根にかすかな息吹春の雷
 母馬の仔馬に活を入れ遊ぶ
 春の雷目玉ひん剥く仁王像
 春雷や人の手少し借りて活く

境 延昭
 木 和子
 由紀子 報

光 延昭
 マスミ 和子
 貴美子 報
 延昭
 和子
 以上特選

幾 愛
 子 子

春の雷一瞬戸惑ふ靴の紐
 絵馬どれも就活言葉春浅し
 春雷や一瞬見やる西の方
 春雷や寺の縁先暫し借り
 逃避行か渡しに二人春の雷
 引き摺らぬ怒りもあらむ春の雷

和 貴美子
 葉 チアキ
 光 子
 マスミ
 和 子

山中みどり 報
 太田 絹映
 笹 城
 昌 弘
 以上特選

ビル街の余白の空や鳥帰る

敏 江

第二例会（東京本所）

春の月砂場に残るうさぎの絵
 つづら折りのタイヤの軋み涅槃の日
 ぱりぱりと淡き翡翠のレタス裂く
 涅槃会や絶滅危惧種またひとつ
 涅槃会やインコ眠るはこの辺り
 辛夷咲く浅草生まれのふりをして
 風鐸の音かろろかと涅槃西風

山 中みどり
 太田 絹映
 笹 城
 昌 弘

峰 雄
 以上特選

以上特選

涅槃とは俗世の我に遠きこと
 よごすな涅槃はいつも寝てばかり
 満を持し木蓮白を放ちけり
 懐しき曲の流れに目覚む春
 儂きは触れずに消ゆる涅槃雪
 三月の戸は閉めないで誰か来るから
 万物のうごめく気配涅槃かな
 学僧の襟足白し涅槃寺
 彼岸詣手押し車の砂利の道

寿 陽子
 峰 雄
 玲 子
 淑 江
 笹 仙
 鶴 城
 絹 映
 みどり

たんぼばや子を呼びに来て子と遊ぶ
 惜別のピオラの音色卒業す
 たんぼばに輪廻転生するもよし
 タンポポの綿毛童話の門くぐる
 たんぼば野山羊に短き遊び綱
 初恋は色褪せぬもの鼓草

五明 昇 報
 曲淵 徹 雄
 清 久
 喜 久
 みどり
 康 世



疎ましや連理の枝も梅の夜も
たんぼばや丘の風車の遊び癖

萬蝶
昇

昂りてひかり離さず雪解川

喜恵
以上特選

磯遊び鳶に「べんとう」さらはれて
母と子の砂のオートや磯遊び
寄する波テトラポットと磯遊び
いつよりか娘も好む土筆和へ

美佐尾
義子
理恵
佐江

竿売りが声を曳きずる坂二月
踏青や生まれ在所に似たる山

みどり
雅夫

震災を知らぬ蒲公英地に満ちて
朝日波み畑艶やかに雪解かな
蒲公英野向こう岸よりビル迫る

曆文
玲子
恵子

托鉢の脚半に跳ぬる雪解水
仰して深谷下る雪解かな

順子
でん治

たんぼばやミルクの匂ひ稚児地藏
忘れ去りたる童心のありたんぼば野

喜久
康世

たんぼばへ紙飛行機の急降下
襟たてて寅さんの来る雪解風

昇
延昭

野良草履紅き鼻緒や茎立ち野
余寒なほ丁重にくる詐欺電話
夜上りの滴をのこし茎立菜

さく子
ひさの
貴美子

暖かなベンチを猫にとられけり
たんぼばやロケの歩兵の鼻の先

清
大場順子

山あひの至福の宿の雪解風
日本海へそぐ源流雪解川

寛治
翔太

合嗽薬はうがひ用のみ余寒なほ

以上特選

桃の花活けて華やぐ旧家かな
たんぼばや問はれて詰まる我が出自

由美
岡野順子

たんぼば咲くパレットに置く色の艶
雪解けや老の別れは一人づつ

光弥
喜恵

山窪は母のふところ茎立ちぬ
耐へながら茎立の茎伸びてゆく
石段を昇りて余寒の中にをり
御飯ふつつ煮えたる気配余寒かな

さく子
順子
光子
愛子

一輪車を漕ぎだす少女たんぼば野
未来のみ持ち蒲公英の絮飛びぬ

徹雄
理恵

雪解けや老の別れは一人づつ
たんぼば野毬のごとくに駆け来る子

光弥
喜恵

己が自心得しごと茎立てり

由紀子
ひさの
貴美子

下町に伊達とお侠の猫の恋

昇

雪解けや老の別れは一人づつ
たんぼば野毬のごとくに駆け来る子

喜恵

己が自心得しごと茎立てり

由紀子
ひさの
貴美子

第四例会 (浦和)

石井 喜恵
境 延昭

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江
河野はるみ

蒲公英や山下清の笑ひ声

曆文

並び立つ土筆お伽の兵に似て
合流が大河となるやつくし摘む

水尾

山窪は母のふところ茎立ちぬ
耐へながら茎立の茎伸びてゆく
石段を昇りて余寒の中にをり
御飯ふつつ煮えたる気配余寒かな

以上特選

歩み初む稚児の冒險たんぼば野
蒲公英の絮のとびつく少女の背

玲子
順子

スカートをちよいとからげて磯遊び
宝物殖ゆるパケツや磯遊び

義子
はるみ

己が自心得しごと茎立てり

ひさの
貴美子

りんりんと蒲公英の絮空かける
山毛榉林の雪解まるく根元より

でん治
延昭

人魚のやうに座る乙女よ磯遊び

佐江

己が自心得しごと茎立てり

貴美子

千枚田の上へ上へとたんぼば黄
捨畑にたんぼぼの国生まれをり

翔太
マスミ

対岸の声飛び来たりつくしんぼ

以上特選
水尾

鉛筆の芯五ミリに揃へ大試験
玄海の荒ぶる波や受験の子

千春
鶴城

若松句会 (京橋)

菊池ひろこ
石田 慶子

三浪の風格隠し受験生
菅公を拝み倒せよ受験生
家中の光の束や合格子
枝に風幹に矢印大試験

慶子
萬蝶
佐江
ひろこ

—以上特選

めざすのは富士の高嶺よ大試験
後を追ふ犬に受験と言ひ聞かせ
俯く子天を仰ぐ子大試験
大試験靴紐きりり眉きりり
風向きに受験の絵馬の競ふ音
さう言へばこれで最後の大試験
受験生バントヒットを狙ひをり
今日まではわがままいっぱい受験の子
大試験いまだ疼きし傷のあり
受験子の險しき眼まなこかな
受験子は双子弟よく笑ふ
廊下にも目覚し時計受験の日
一陣の風も出来事大試験

俊晴
儀勝
千春
佐江
倭子
慶子
鶴城
月を
理恵
知子
萬蝶
はるみ
ひろこ

☆

☆

通信指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、
通信指導を実施しています。希望者
は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

記

〔指導者〕 境 延昭

〔作品〕 七 句 〔受講料〕 千 円

〔方法〕 ①用紙自由②住所・氏名・

電話番号を明記③84円切手同封

④返信用封筒は不要⑤締切は随時

〔送付先〕 境 延昭

〒三三七―〇〇四一 さいたま市

見沼区南中丸一―一―四一

電話 〇四八―六八六―二二八一

水明発行所受付時間

曜 日：(月・水・金)

時 間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)

各地句会



和歌山水明句会 (和歌山)

風鐸の韻く朝や牡丹の芽
料峭やいま出港の拳手の礼
コロナ怖し今日も一人の春炬燵
通信簿の批評鋭し春燈下
球児らの無念の涙春の星
しやばん玉父子で飛ばす絆かな
春耕や馴れぬ男の及び腰
齧歯抜かれ一氣に錆びる白木蓮

若狭水明会 (若狭)

祝ひ日や海の香も盛る蒸蝶
身離れのほくほく旨し蒸蝶
流れ来る琵琶湖の歌や花辛夷
むしがれい認知症とて忘れまい
浜風や骨透き通る蒸蝶
蒸蝶軒を吹き抜く浜の風

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廻代 初花 和風 白鷺 冬至 保人 鼓

美しき若狭塗り箸蒸蝶
遠くなる親孝行や花こぶし
蒸蝶左丹後へ続く道
極上の里の便りや蒸蝶
辛夷咲く大きな月をせり上げて
櫻の会 (浦和)

いのちまためぐり輝く木の芽道
春の雨陸奥に九年と言ふ月日
往き交ふ人皆霏りたる春の雨
濃く薄く木の芽早くも顔を出し
福島への飛石洗ふ春の雨
茶室への飛石洗ふ春の雨
春雨や寄りし娘の忘れ傘

阜月の会 (浦和)

強東風や行つたままなるフリスビー
パンジーに語りかけたる明るき日
崖に咲く堇ふるはす光かな
三味線のもれくる路地を春シヨール
巢立つつ子に届く吉報桜東風
廃校の壁に「夜露死苦」すみれ咲く
柿の木塾 (浦和)
燕来る吾が通ひ路の駅庇
半島は母艦の如しつばめ来る

郁子 寛久 ことは 祥子 想子 彰二 千重子 裕之 克之 朋子 富子 治子 静香 孝磨 カズ子 久子 暦文 さいち 昇 水尾

水田を低く低くと截る燕
空のほひ土のほひや燕来る
春分や天の動きに遅滞なく
燕飛ぶ電気自動車充電す
助走して跳ぶ畦川やつばくらめ
燕三羽飛び交ふ車教習所
眼の奥を黒の一閃燕来か

円卓の会 (浦和)

手酌なる徳利二本厚星忌
海求め母を求めて三鬼の忌
大石忌己は分らぬ加齢臭
丸めたる紙の匂ひや光悦忌
青葉の会 (浦和)

しじみ汁回転寿司で一人飯
再会は花どきと決め電話切る
心地よい転た寝遠く春の雷
春を書く書家の字面やサイン会
相輪の奈良の空より春の雷
春雷の轟く海や波光る
けやきの会 (東京)
うぐひすの一声に朝動き出す
置き去りのボールの沈むたんぼ野
ふる里に大朝寝して富士に恥づ

恵子 光弥 俊晴 節代 かつ子 和葉 和子 翔太 月徹 鶴城 美子 啓子 公子 洋子 和子 輝翠 由美 祥絵 康世

蝸 蚪 の 会 (浦和)

絵付師の運ぶ筆先春立ちぬ
花の雨ふたりで歩くお堀端

閨日もまとめ仕事の二月尽

ひたひたと見えぬもの来る弥生かな

大欠伸隣のひとつと春うらら

春めくや平安絵巻の宇宙観

花冷やメールの返信待つてゐし

光が丘俳句教室 (東京)

「ヤッホー」と決り文句に山笑ふ

花辛夷ハンドベルの如共鳴す

山笑ふ家みな似たる新開地

歙の先啓蟄の虫放り投げ

ロープウェイの長蛇の列や山笑ふ

鶴川山百合句会 (鶴川)

鳥倉千代子「人生いろいろ」寒戻る

余寒なほピアノの眠る奥の部屋

切り忘れの目覚し時計鳴る余寒

余寒かな声出せば鳥ちりぢりに

童謡を流し余寒の灯油売

赴任せし夫の二階の部屋余寒

街路樹の小さくなりて余寒なほ

フラダンスの強張る腕の余寒かな

宣子

さち子

礼子

元美

鶴城

月を

守伊

はる

康子

史子

理恵

八洲男

雄二郎

月を

史代

広子

知子

由美子

萬蝶

余寒なほロマンスカアの通過待ち
納棺師の整へし貌二月尽

櫻 蔭 句 会 (浦和)

街道の手押しポンプや花の冷え

弥生対局白くしなやか棋士の指

肩車にしがみつく指風光る

花冷や飾らずに行く父の家

足の指の痺れも忘れ青き踏む

巢立つ子の声が遠のく花の冷え

花冷や茶粥うれしき箱根宿

種えらび短き指は母譲り

花冷を来てつと潜る縄のれん

あゆみの会 (浦和)

春雨に裳裾濡らしつ神楽坂

風そよぐ土手の斜面にいぬぶぐり

軒下に猫の見つむる春の雨

春雨に滲んでをりぬタワーの灯

春の雨深煎り珈琲ブラックで

春風稜線に雨斜めなり

さざきサークル (浦和)

牧童に仔馬ひと蹴りして見せる

乳ねだる牧の仔馬に風やさし

慈悲の目に包まれ育つ仔馬かな

理恵

玲子

美智枝

多美子

真理

由紀子

美紗子

幸代

茂子

公子

マスミ

圭子

和子

重子

朋子

山遊

藻好

俱子

啓子

喜代子

春駒の鬣なびかせ草千里
遠吠えや夜空に消さる弥生かな

建ち並ぶソーラーパネルの弥生かな

蒼き湖見ゆる弥生のテラス席

大宮読売俳句教室 (大宮)

我先と角をつき出す木の芽かな

コンポートに弾む果物水温む

水温む水掛不動の顔ゆるむ

鯉が身をのり出す音や水温む

野の川の魚になりたや水温む

木木芽吹く手帳片手に土手通り

御神木の万枝に光る木の芽かな

雨止んで鳥こぞりくる木の芽かな

邪氣払ふ気迫が欲しい木の芽時

観音の肩なだらかや木の芽時

木の芽どきものみな動き初む気配

貴婦人なる木の芽ふくらむ奥日光

御手洗のあたらしき杓水温む

芙蓉句会 (浦和)

通りすがり聞こゆ園児の雛祭

かしましき五人姉妹や雛の膳

雛ケーキを飾りて雛の代りとす

行灯の火影に踊る官女雛

曲がりたる平緒気になる男雛かな

かつ子

和枝

和子

卓郎

治子

翔太

典子

正信

弘夫

君夫

徹雄

サヨ子

寛治

利子

紀子

順子

正子

道子

税子

仁子

美子

野ばらの会 (浦和)

山の辺に露の臺摘むカニ歩き
清里の改札出でぬ春夕焼
囀に未だ目覚めぬ古墳かな
すれ違ふ車の撥ねし春の泥
令和二年塵紙消えゆく春の風邪
折り合はぬ筆措く宵の花の冷
慣れし道彼岸参りの刺身膳

芽吹句会 (浦和)

ヒヤシンス美貌の猫と出窓かな
瀬戸内の鳥それぞれに夕霞
校長も時折水をヒヤシンス
ヒヤシンス夜会を終へしロングヘア
テノールの愛の賛歌やヒヤシンス
地中海の青を想ふか風信子

かわせみ句会 (浦和)

春の雨口紅の色替えました
山の風三味線草に来て低し
白馬を背に里山は春の雨
春の雨水玉模様傘嬉し
三味線草誰も待たずに開きけり
昼休みべんべん草を鳴らし合ひ
河川敷の風に揺れをり花薺

茂子 夏江 和子 栄子 治江 みき子
チアキ 富子 千重子 ひろこ 玲子 徹
敏子 智子 良枝 順子 信子 保子 友子

爆音に機影は見えず花薺

春の雨結び目ゆるき小風呂敷
春雨や持ち寄り料理賑賑と
べんべん草口三味線も程程に

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

離れ家の銅の廂や梅の花

振じ曲がる老幹の枝梅真白

荷造の本の重さや梅開く

春の風邪隣の枕気にかかる

梅花二分火渡りをする豆験者

いざ鎌倉梅に急かさる切通し

たかな俳句会 (川口)

待合せは芽柳の下あさみどり

料亭の奢りの庭や柳の芽

昭和の匂ふ映画看板柳の芽

天と地の恵みを秘めて春の泥

わが影に稚魚散るはやさ柳の芽

芽柳や広重の絵と同じ風

花衣の会 (浦和)

春嵐少なき髪も怒髪立て
初蝶やブロンズ像の肩にふれ
淵の色いよ濃さ増し山笑ふ
おにぎりの粒夫のほほに山笑ふ

治郎 紀子 育子 延昭 正信 美晴 俊晴 俱昇
和子 義子 鶴城 真知子 水尾 静香

谷水の音トレモロに山笑ふ

ざらざらと升から零す蛻売り

りそな俳句会 (浦和)

ゆるやかに大地の目覚め春の土

芽柳や水面まぶしき向鳥

畝立ての準備万端春の土

春の土出番待つ子の深呼吸

春の土遠回りして踏み行かむ

芽柳の揺れて山河を呼び覚ます

東京の厚底ランナー春の土

万歩目指す靴にしつくり春の土

珊瑚の会 (浦和)

頑張ると言うてはみたが春の虹

子の丈に合せ膝折る春の虹

ソムリエの振舞ゆかし春の虹

消ゆるまで帯にもたれ春の虹

サーファーの大き手のひら桜貝

渡せないままの文あり春の虹

傘立にのこるステッキ黄水仙

見えぬウイリス消してたもれよ牡丹雪

ポケットの拳に決意卒業す
いぬぶぐりグーチョキパーの幼き手
ドレッシング並べ朝食黄水仙
春芝居オペラグラスに薄ぼこり

治章 勲文 徹夫 雅夫 寛治 建治郎 マスミ
かつ子 喜恵 マスミ 水尾 昇 恵子 光代 史代 和子 広子 和子 節代

水明大阪俳句会 (守口)

花ミモザきらりと誘ふカフェのノブ

惜春の気を殺ぐ新型コロナかな

池波に刃びかりに蘆の角

恋猫さん恋に破れて吾の膝に

三陸の春置き去りのランドセル

草餅や実家の頼みとされる友

祝ぎの客揃ふを待ち春暖炉

兜太忌やあの掌の温もり忘れまじ

新樹の会 (浦和)

花吹雪うねりて軒を越え行けり

引き払ひ主なき家鴨帰る

春の雪三島由紀夫の自己矛盾

鳥帰る五百羅漢へ向ふ道

玉響の春のみ雪の別れかな

越冬の青菜目覚むる春の朝

春北斗輝くあたり越の国

鳥帰る漣はなほ伊豆沼に

水明熊谷句会 (熊谷)

順風も逆風もあり花ひらく

種見ゆるにはか手品師花筵

令和の花見コロナ騒ぎで無観客

明暗を分けて華やぐ今朝の花

ゆら女

洋子

ヒサ子

智恵子

卓也

人美

和子

敦子

鶴城

清吉

平通

京子

韶子

紅花

徹

でん治

栄子

徹平

正行

和子

静静と白磁にひらく桜漬

花筏組み直しては早瀬越え

ほのぼのと明けゆく空に花の雲

花咲けど子らの声なき通学路

山吹の山路明るき撓ふ枝

神戸大池句会 (神戸)

亀鳴くや雨の天文科学館

パソコンもメールも無縁山笑ふ

音もなく木々への別れ春の雪

いかなごの漁獲ゼロ日の心拍数

水明小川句会 (小川)

農家減り不用の水路蝌蚪群れる

日溜りの墓地が居場所とすみれ草

一群のすみれの色に心澄み

マスクしてだんまり続く人と人

若き日と変はらぬ妻よ相撲花

春動き八十路の吾も負けまいと

よちよちの手に一輪のすみれ草

ミモザの会 (横浜)

陽炎や揺らぐ人影異界より

陽炎や庭中に花揺れてをり

陽炎の中に次次背番号

湖の女神の下肢陽炎うてゐたりけり

触れもせて渋谷ヒカリエ陽炎へる

秀子

燈女

治江

裕子

茂子

玲子

礼子

千津子

早苗

むら子

みや

武

千代子

綾子

藤十郎

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

栄子

ふにやふにやの横断歩道かげろへり

シネマ出てヒロインのままかぎろへる

長旅の駱駝の列のかぎろへり

寄り添うて砂丘のふたり陽炎へり

水明松本句会 (松本)

どれどれと紳士も覗く燕の巢

春の空とんび下界を窺ひて

ママ限界緊急事態の春休み

私見てと言はんばかりに梅満開

空あをく見頃の梅に鳥あそぶ

俳句の手ほどき (岩槻)

源流に近き沢音山椿

片恋は刺の痛さよ花山椒

八重桜伯母の初恋聞いた伊豆

画用紙で手書きの名刺卒園児

江戸前の刺子半纏梅の守る

沖めざす刺網漁船蟹気楼

火の川とななるや古刹の落椿

春の風頬に刺さりし砂の粒

脚半付け山路を行くや雪椿

聖女とも墮天使とも白椿

富士山は大き水瓶落椿

邸宅を占むる椿の王者めく

女手で仕切る花市雪椿

つらつら椿唇厚き婦人像

由美子

萬蝶

玲子

千春

恒子

陽子

マリ子

玲子

寿子

順子

忠男

俊子

微平

延昭

翔太

義尾

水尾

美佐尾

佐江

ます美

慶子

幸代

かつ子

風 声

○俳句四季三月号―「風土を詠む・埼玉」欄

篠垣や鰻の「松」を声高く

鬼之介

○俳句三月号―「俳人「超」大アンケート」

「あなたの座右の書を教えてください」欄

山本鬼之介（水明）「まぼろしの鱗」三橋敏雄書

○現代俳句三月号―「列島春秋・地区別現代俳句歳時記」欄

「埼玉」春寒し角のつつ張る紙袋

石井喜恵

○現代俳句三月号―「現代俳句の風」欄

まほらなる平成最後の初参賀

河原叔子

菜の花の堤延々夕陽まで

近藤徹平

姉妹三人同月生まれ室の花

町野広子

春告鳥先づ一鳴きはみ仏に

丸山マシミ

○現代俳句三月号―「現代俳句の風」秀句を探る

三好靖子氏の感銘十句抄に

近藤徹平

菜の花の堤延々夕陽まで

○現代俳句三月号―「新入会員記念作品」欄

野仏のおん手に遊ぶ桐一葉

神田治江

歳重ね無欲もたのしくリスマス

鈴木和子

碑の歲月重き残暑かな

鈴木和子

遠き日の戦ひ知らぬ水の秋

虫時雨山の出で湯を一人占め

染谷正信

煩惱はまだまだ盛ん泥鰌汁

○玉梓（名村早智子主宰）三、四月号―「他誌拝見」欄

大山が小山したがへ初御空

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）三月号―「受贈俳誌美術館」欄

一月や蒔絵の箱に夜叉の面

鬼之介

漆黒の闇を動かす鯛起し

梅澤佐江

○太陽（柴田南海子主宰）三月号―「一誌一耀」欄

荒神の杜も覚めたか初明り

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）三月号―「諸家近詠」欄

大山が小山したがへ初御空

鬼之介

○新月（松田碧霞代表）三月号―「受贈俳誌紹介」欄

荒神の杜も覚めたか初明り

鬼之介

○天穹（屋内修一主宰）三月号―「受贈俳誌より」欄

荒神の杜も覚めたか初明り

鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）三月号―「諸家近詠」欄

晩秋の夕陽あまねく水車小屋

鬼之介

○苜（山本一步主宰）三月号―「受贈誌の一句」欄

ちちろ虫空家に残るゐざり機

大塚茂子

道なりに行けば館に冬薔薇

野田静香

（日高徹抄出）

水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和二年三月三十一日現在 —

岡野 順子	5	口	佐々木文子	3	口
田中 千穂	30	口	山戸 美子	3	口
日高 徹	5	口	野田 静香	5	口
野田 静香	3	口	石田 慶子	5	口
葛城千世子	5	口	秋山 冷子	10	口
阿部 幸代	3	口	松田 朋子	3	口
関根 千恵	5	口			
			— 合計 85 口 —		

水明発展基金募集のお願い

○一口千円 何口でも何回でも何時でも。

○振込口座番号 0013015145024

○領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。

水明俳句会・水明発展基金

水明夏行のご案内〈予告〉

例年どおり水明夏行を開催します。午後の時間帯で浦和駅すぐ近くの会場です。参加受付は当日会場で行います。

大勢の皆さんの参加をお待ちします。

【日 時】 令和2年7月29日(水)・30日(木)・31日(金)
午後1時～5時

【会 場】 JR 浦和駅東口「浦和パルコ」10階
浦和コミュニティーセンター
未定

【参加費】 第1日～第3日を通じて 3,000円
(1日のみの場合は 1,000円)

研 修 部

後記

新型コロナウイルスがこんなにも猛威を人類に被害を齎すとは誰も思っただけなかったと思う。平和な日本はどこから来てどうやって感染しているのか異体に対して何も出来ない人間が菌痒い。その為に私達の俳句の世界にも大変な迷惑をかけている。唯一楽しみにしている句会が緊急事態宣言により止むを得ず中止せざるをえない。

常ならばこの季節は卒業、入学、又社会人として巣立ちの時期でありこの全部取り止めとなる。しかしこの逆境に運悪く出会ってしまった方達は一生忘れることが出来ないでしょう。私もこの後記を病院の机の上で書くとは思っても見なかった。私の心臓も長年使っていたので大変疲れていたようで、三月二十三日に入院したのは運がよかった。感染拡大によって自宅待機、自粛の今、退院は不可能といわれているのもう少し入院している。十一月の90周年大会には元

気になります。

(順子)

コロナウイルスの感染で今世界が震えている。日本でも毎日感染者が不特定多数で増え続けている。公共の施設は学校をはじめ全て休みとなっている。会社などは時差出勤やテレワークなどで仕事の調整を行っている様である。

近所の公園も子供達が何時にも増して賑やかである。大人も、運動不足の解消と体操や縄跳びボール遊びなどをしている。多く見かけるのは、夫婦や家族でジョギングや散歩をしている姿である。今まで少なかった会話が増えたり、道端に咲いている花に興味を持った父に花の名を教えたり、果ては家庭菜園を始めたりと新たな発見を見出した人も居ると云う。

緊急事態宣言が発令され、渋谷駅の忠犬ハチ公もコロナマスクを着用している。俳句の会も今は皆さん自粛され殆ど休会である。友達に逢いたいおしゃべりがしたい。俳句を作りたい。

時の疫の「三密」ごもり

春ごもり(和子)

さいたま市では、午後五時になると「春の小川」の曲が流れる。遊んでいる子供達に「もう帰ろう」という合図らしいが今、子供達は外で遊んでいない。遊んでいても友達とキヤッキヤツというわけにはいかない。家の中には、ストレスが溜まるのも目に見える。

近所の家の庭に仰ぐ程の大きな松の木が二本ある。朝、植木屋がクレーンを使って剪定をしていた。以前、別所沼でこんな光景を見た事がある。メタセコイアと思う。外出し、五時間程して帰って来たら、二本共終つていて、すっかり軽々しくなり青空に映えていた。植木屋の姿が見えたので、声を掛けたら「今は機械があるから、無かったら幾日かかるか、電信柱より大きいからね」と見上げて満足だった。「松手入れ」の話をしたら「あれはまた大変だよ、一葉一葉だからね」と言い、明日は落ちた枝や葉の掃除に来ると言つて帰った。

(和葉)

水明

令和二年五月号

通巻一〇七六号

令和二年五月一日発行

発行人 山 本 鬼 之 介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二-18
電話 048-1886-1600三

発行所 水 明 俳 句 会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四一〇-22
電話 048-1822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一八九三九三

印刷所 中 央 美 版

季音抄

山本 鬼之介

マネキンの飛天のやうな春着欲し
生きてをるうちに聴きたし亀鳴くを
春の野の夜又か天女か迷ひ子か
裁ち物のチャコの曲線春の雪
枝に風幹に矢印大試験
蜺舟むかし栄華の十三湊
少年の夢は飛行士木の芽吹く
土筆野は浄土をかもし空真青
山吹や庭師が決むる石の顔
春眠や目ざめてもなほ夢の中
土現るる地球の裏のカーニバル
捨畑にたんぼぼの国生まれをり
人魚のやうに座る乙女よ磯遊び
春雷のおつとりと来る村境
歩みそむ稚の冒険たんぼぼ野
つばくらめ街に昭和が甦る
暮れてなほ明るき水路柳の芽
冬ばらを娘と思ひ目をかける

石山かつ子
大橋 廻代
大村 節代
栢尾さく子
菊池ひろこ
五明 昇
高島 寛治
柚木 治子
鳥羽 和風
宇田 白鷺
藤澤 喜久
丸山マシミ
梅澤 佐江
松井由紀子
井上 玲子
井口 俊晴
森川 義子
山田美佐尾

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本 鬼之介

初曆めくれば 未来動き出す
 母の背より 値札がのぞく 余寒かな
 下 萌や 我に 囁く 応援歌
 裸 婦像に 兆す 胎動 春うらら
 鶯や 運び 留むる 筆の 先
 冬の 灯や 人より 多き 村の家
 封切れば 墨の 匂ひの 花 便り
 横丁を 傘か しげして 春時 雨
 オンザ ロックの 音の 乾きや 遠雪 崩
 片恋を 春の 氷に 閉ぢ 込めて
 斜交ひの 庭に 椿や 竹と んぼ
 白壁に 映ゆる 紅梅 鳥の 影
 紅梅や 幽玄 かも す 祇王 像
 薄氷を 解かす 日射し が 心にも
 寒林や 終の すみか に 射す 入り日
 廃線の 鉄路の 錆や 草 萌ゆる
 笥のこして 溪谷 下り 行く 雪 解
 早春の 土手に 多勢の 豆画 伯

越田 栄子
 渋谷きいち
 野田 静香
 曲淵 徹雄
 青木 鶴城
 保坂 翔太
 神田 治江
 河野はるみ
 正木 萬蝶
 原田 秀子
 近藤 徹平
 大塚 茂子
 宮崎チアキ
 熊倉千重子
 日高 徹
 染谷 正信
 加藤でん治
 新 曆文

水 明 例 会 案 内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境 延昭 石 井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水 明 発 行 所	山本鬼之介	梅澤 江 河野 はるみ
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉 代	森 本 早 苗
	婦人句会	第3月曜・午後1時	水 明 発 行 所	山 中 順 子	西山 貴 美 子
	若松句会	第1土曜・午後1時	京 橋 区 民 館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石 田 慶 子

水 明 令和二年五月一日発行 毎月一日発行

(第九十三巻 第五号) 定価 一〇〇〇円